

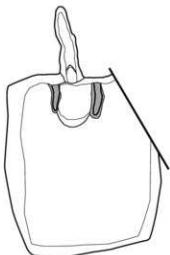
渡里町遺跡

(第42地点第2次)

—学生寮建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

渡里町遺跡

(第42地点第2次)



二〇二二

2022

水戸市教育委員会
株式会社毎日コミュニケーションズ
株式会社ラクロ

渡里町遺跡

(第42地点第2次)

—学生寮建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2022

水戸市教育委員会
株式会社毎日コミュニケーションズ
株式会社ラクロ

ごあいさつ

渡里町遺跡は、那須茶臼岳を水源とする那珂川下流域右岸の台地上に位置しております。この渡里町遺跡の周辺には、古代常陸国那賀郡の寺院・官衙遺跡である国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」や、県下有数の規模を誇る前方後円墳である国指定史跡「愛宕山古墳」等が残されており、古くから政治・文化の中心地域であったと考えられます。

歴史的文化遺産のひとつである埋蔵文化財は、工事や開発などにより、一度破壊されると二度と原状に復すことはできません。そのため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならぬ貴重な財産です。

近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつありますが、本市においても、その意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた埋蔵文化財の保護・保存に努めているところです。

このたびの調査は、当該遺跡内における学生寮の建設工事が計画され、遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねて参りました。しかしながら、建物の一部で遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとしたものです。

本調査では、縄文時代から古代を中心として、多くの遺構や遺物が確認されました。特にこれまで知られていた縄文時代の集落遺跡としての姿の他、奈良・平安時代を中心とした遺構群の展開は古代那賀郡が存在した時代における地域社会の様子を解明する上で、貴重な資料となるものです。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と、学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施および本書の刊行にあたり、事業者の株式会社毎日コミュニケーションズ様をはじめ関係者の皆様、地域住民の皆様には多大なご理解とご協力を賜りました。末筆ながら心から感謝申し上げ、ごあいさつの言葉といたします。

令和4年10月

水戸市教育委員会

教育長 志田晴美

例　　言

1. 本書は、水戸市渡里町内における学生寮建設工事に伴い実施した、渡里町遺跡第42地点第2次の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は株式会社毎日コムネットの委託を受けた株式会社ラクロが、水戸市教育委員会の指導のもとで実施した。

3. 調査概要及び調査組織は以下の通りである。

所 在 地 茨城県水戸市渡里町字小山ノ上 2469・2470-1・2471-1

調査面積 410 m²

調査期間 令和4年3月3日～令和4年4月6日

4. 発掘調査組織は下記の通りである。

調査担当者 大橋 生（株式会社ラクロ）

調査補助 金川真也・服部将大（株式会社ラクロ）

事 務 局

志田晴美（水戸市教育委員会教育長）

増子孝伸（水戸市教育委員会事務局教育部長・令和4年3月31日まで）

三宅 修（水戸市教育委員会事務局教育部長）

小川邦明（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課長）

川口武彦（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター所長）

米川暢敬（同調査係長・令和4年4月1日から）

新垣清貴（同主幹）

廣松滉一（同文化財主事）

丸山優香里（同文化財主事）

松浦史明（同埋蔵文化財専門員・令和4年3月31日まで）

栗原秀英（同埋蔵文化財専門員）

藤本 咲（同埋蔵文化財専門員・令和4年2月28日まで）

有田洋子（埋蔵文化財センター会計年度任用職員）

昆 志穂（同会計年度任用職員）

庄司 優（同会計年度任用職員・令和4年3月31日まで）

5. 調査参加者

（発掘調査）岡野政雄 鈴木光輔 立原正一 村上巧兒 山田恵弘 山田智恵子

（整理作業）飯塚恵津子 岩田真由美 大川亜弓 尾馬むつみ 峯 瑞穂 村山彩子

6. 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、一括して水戸市埋蔵文化財センター（大串貝塚ふれあい公園）にて保管している。

7. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。

記して深く謝意を表す次第である（敬称略・順不同）。

株式会社毎日コムネット 茨城県教育庁文化課 五十嵐建設工業株式会社 タクミテック

株式会社まちプラン研究所

凡　例

1. 測量は世界測地系座標を用い、挿図中の方位は座標北を示す。
2. 挿図中で使用した遺跡の略記号は以下を示す。
SI : 壺穴建物跡 SD : 構状遺構 SK : 土坑 P : ピット TP : テストピット K : 攪乱
3. 土層及び断面図に記した数値は標高を示す。
遺構の形態・規模は基本的に現状の掘削した状態で判断した。計測は壁上端で行った。
深さは検出面の最も高い位置から遺構内の最も低い位置まで測り、遺構内施設の深さは床・底面の位置から計測している。
4. 掲載した図面の縮尺は、原則として以下の通りである。
調査区全体図 1/300 遺構平面図・断面図 1/100・1/80・1/60・1/30
遺物図 1/3
5. 遺構の土層及び遺物の色調表現は、『新版標準土色帖』2008年版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。
6. 遺物観察表に付した（ ）は復元値、< >は残存値として表す。遺物の計測値は規模を「cm」、重量を「g」で表した。
7. 遺構図における土層説明で、微・少・中・多量は土層内における含有物の割合を4区分したものであり、それぞれ、微量は1%以上～5%未満、少量は5%以上～15%未満、中量は15%以上～30%未満、多量は30%以上を示す。粒子は20mm未満、ブロックは20mm以上を示す。
8. 写真図版は、実測図の縮尺に合わせて掲載した。また遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。
9. 遺構・遺物実測図中のスクリーントーンおよび記号は、以下に示すとおりである。

焼土 ■■■ 粘土 ■■■ 攪乱 [] 推定線 []

織維 [] 須恵器 ■■■ 被 热 ■■■ 灰釉陶器 ■■■ 黒色処理 ■■■

10. 「主軸」はカマドを持つ壺穴建物跡についてはカマドを通る軸線とし、他の遺構については、長軸（長径）とみなした。また、「主軸（長軸）方向」は、その主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示している。
(例 N-10°-W)
11. 本遺跡の略号は201-121-042である。遺物の注記もこれに従っている。

目 次

ごあいさつ	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と調査方法	2
第3節 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 渡里町遺跡における既往の調査	8
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 検出された遺構と遺物	13
(1) 竪穴建物跡	13
(2) 溝状遺構	21
(3) 土坑・ピット	26
(4) 遺構外出土遺物	28
第4章 総括	33
参考文献	
写真図版	
報告書抄録・奥付	

挿図目次

第 1 図 試掘調査トレーンチ配置図	2	第 15 図 3号堅穴建物跡出土遺物	20
第 2 図 調査区位置図	3	第 16 図 1号溝状遺構	22
第 3 図 渡里町遺跡と周辺の遺跡位置	6	第 17 図 1号溝状遺構出土遺物	23
第 4 図 渡里町遺跡の範囲と既往の調査地点	8	第 18 図 2号溝状遺構	24
第 5 図 基本層序	11	第 19 図 3号溝状遺構	25
第 6 図 全体図	12	第 20 図 土坑	26
第 7 図 1号堅穴建物跡	14	第 21 図 ピット（1）	26
第 8 図 1号堅穴建物跡掘り方	15	第 22 図 ピット（2）	27
第 9 図 1号堅穴建物跡カマド	15	第 23 図 遺構外出土遺物（1）	28
第 10 図 1号堅穴建物跡出土遺物	16	第 24 図 遺構外出土遺物（2）	29
第 11 図 2号堅穴建物跡	17	第 25 図 遺構外出土遺物（3）	30
第 12 図 2号堅穴建物跡出土遺物	18	第 26 図 長煙道カマド	33
第 13 図 3号堅穴建物跡	19	第 27 図 周辺遺構分布図	34
第 14 図 3号堅穴建物跡カマド	19		

挿表目次

第 1 表 渡里町遺跡と周辺遺跡一覧	7	第 8 表 3号堅穴建物跡	
第 2 表 既往の調査一覧表（1）	9	出土石器・石製品属性一覧	21
第 3 表 既往の調査一覧表（2）	10	第 9 表 1号溝状遺構出土土器属性一覧	23
第 4 表 1号堅穴建物跡出土土器属性一覧	16	第 10 表 土坑・ピット計測表	27
第 5 表 1号堅穴建物跡 出土石器・石製品属性一覧	16	第 11 表 遺構外出土土器属性一覧（1）	30
第 6 表 2号堅穴建物跡出土土器属性一覧	18	第 12 表 遺構外出土土器属性一覧（2）	31
第 7 表 3号堅穴建物跡出土土器属性一覧	21	第 13 表 遺構外出土石器・石製品属性一覧	31
		第 14 表 遺物計量表	32

写真図版目次

- 図版 1 調査区全景 北東から 調査区全景 上が北西
- 図版 2 A区全景 上が北西 B区全景 上が北西 A区全景 南西から A区全景 北東から
B区全景 南から B区全景 東から
1号竪穴建物跡土層断面 南西から
1号竪穴建物跡遺物出土状況 西から
- 図版 3 1号竪穴建物跡カマド構築材出土状況 西から 1号竪穴建物跡カマド土層断面 南西から
1号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 西から 1号竪穴建物跡カマド全景 西から
1号竪穴建物跡掘り方土層断面 北西から 1号竪穴建物跡掘り方全景 西から
2号竪穴建物跡遺物出土状況 東から 2号竪穴建物跡全景 南から
- 図版 4 2号竪穴建物跡掘り方土層断面及び掘り方全景 南から
3号竪穴建物跡土層断面 北西から 3号竪穴建物跡遺物出土状況 西から
3号竪穴建物跡遺物出土状況近景 西から 3号竪穴建物跡カマド土層断面 北西から
3号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 西から 3号竪穴建物跡全景 西から
3号竪穴建物跡カマド全景 西から
- 図版 5 3号竪穴建物跡カマド支脚出土状況 西から 3号竪穴建物跡貼り床土層断面 北西から
3号竪穴建物跡掘り方全景 西から 1号溝状遺構土層断面 A-A' 北から
1号溝状遺構土層断面 B-B' 北から 1号溝状遺構土層断面 C-C' 南東から
1号溝状遺構土層断面 D-D' 南東から 1号溝状遺構遺物出土状況 東から
- 図版 6 1号溝状遺構西侧全景 南から 1号溝状遺構西侧全景 北から
1号溝状遺構東側全景 西から 1号溝状遺構東側全景 東から
2号溝状遺構土層断面 A-A' 南東から 2号溝状遺構土層断面 B-B' 南東から
1・2号溝状遺構土層断面 C-C' 西から 2号溝状遺構全景 北西から
- 図版 7 2号溝状遺構全景 南東から 3号溝状遺構土層断面 A-A' 南東から
3号溝状遺構土層断面 B-B' 南東から 3号溝状遺構全景 南東から
3号溝状遺構全景 北西から 1号土坑全景 西から TP1 南東から TP2 北西から
- 図版 8 1号竪穴建物跡出土遺物 2号竪穴建物跡出土遺物 3号竪穴建物跡出土遺物（1）
- 図版 9 3号竪穴建物跡出土遺物（2） 1号溝状遺構出土遺物 遺構外出土遺物（1）
- 図版10 遺構外出土遺物（2）

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

令和3年10月16日付けで、学生寮建設に伴い、株式会社毎日コムネット 代表取締役社長 伊藤守（以下「事業者」という。）から水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）あて、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」（教理第659号）の照会があった。

照会地である水戸市渡里町字小山ノ上2469番、2470番1、2471番の地内は、周知の埋蔵文化財包蔵地「渡里町遺跡」の範囲内に該当しております。令和3年10月26日付けで市教委は事業者あて、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当しております、文化財保護法（以下「法」という。）第93条第1項の規定により茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）あて届出を提出する必要があること、遺跡の発掘調査を必要とする場合には原因者の協力をお願いする旨回答した。

同時に市教委は事業者に地下に縄文時代から古代の遺構が存在する可能性が想定される事から、試掘調査の実施について協議を行い、令和3年10月16日付けにて「開発に係る試掘調査の実施（依頼）」が提出されたことから、令和3年11月30日から令和3年12月2日にかけて断続的に試掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代の遺物包含層、古代の堅穴建物跡、溝跡、土坑等が確認された。

市教委は、令和3年12月10日付け（教理第660号）により、事業者あて試掘調査結果の回答を提出した。

市教委は事業者と確認された埋蔵文化財の保護措置について協議を数回に渡って行ったが、事業内容が構造上、改良工事が地中深くまで及ぶため、設計変更は困難であるとの結論に達し、原因者の費用負担による記録保存を目的とした本発掘調査を行う方向で合意が図られた。

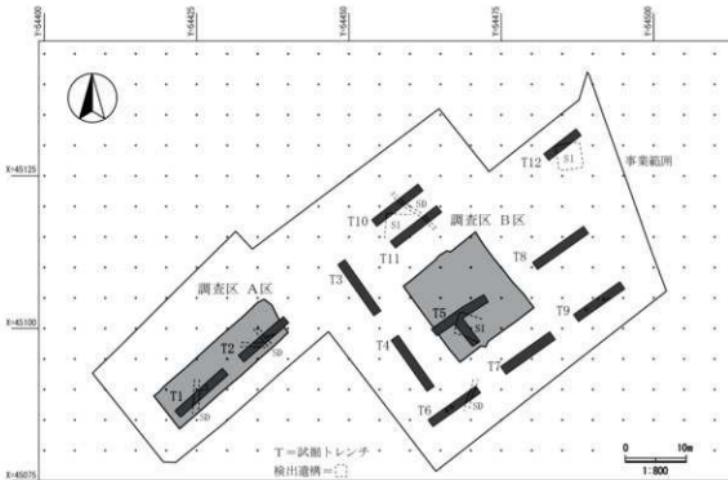
のことから、事業者は市教委に対して文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」を令和4年1月12日付け（教理第921号）で提出した。

市教委はこの届出に意見書を付して令和4年1月13日付けで県教委あて進達した。これを受けた、県教委から令和4年1月17日付け文第3185号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」にて工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が確認された場合にはその保存等について別途協議をする旨、勧告があった。

これを受けて事業者は、令和4年2月4日に株式会社ラクロ（以下「調査機関」という。）と発掘調査業務委託契約を締結するとともに、調査機関及び市教委と発掘調査実施に係る三者協定を締結した。調査機関は法92条第1項の規定により、令和4年2月4日付け「埋蔵文化財発掘調査の届出について」（教理第993号）を県教委あて提出し、その後県教委から調査機関へ令和4年2月15日付け文第3448号「埋蔵文化財の発掘調査について（通知）」にて、適切に発掘調査を実施するよう指示があった。

以上のような経過のもと、当該調査を渡里町遺跡第42地点第2次調査として、令和4年3月3日から令和4年4月6日の期間に発掘調査を実施することとなった。

（新垣）



第1図 試掘調査トレンチ配置図

第2節 発掘調査の経過と調査方法

発掘調査は、令和4年3月3日から同年4月6日まで実施した。調査対象地は二箇所に分かれており、便宜上、西側調査区をA区、東側調査区をB区とした。3日よりA区から重機による表土掘削を開始した。遺構確認面は今市・七本桜駅石層より20cm前後上位で、現地表からはおよそ60cm掘り下げられた。原地形はB区がほぼ平坦で、A区ではわずかに南北へと傾斜している。遺構は一部に耕作関連とみられる擾乱が見受けられ、特にB区では北東から南西へ並走する耕作に伴うトレンチャによる擾乱が顕著であった。8日までは表土掘削を終了した。9日には遺構検出作業、翌10日にはB区の遺構掘削調査を開始した。その後各遺構の土層断面・平面や遺物出土状況などの写真撮影及び実測等の記録作業を適宜進める。31日までは各遺構の調査をほぼ終え、A・B両区の全景写真撮影を行った。4月1日には空撮を実施。5日にはA・B区の各1箇所で基本層序の確認を行った。6日には重機により埋め戻し整地作業を終え、全ての作業を完了した。

遺構平面図は、光波測量機を用い、原則として公共座標（世界測地系）に基づいた3次元記録である。また、遺構の実測については平面・土層断面共に縮尺1/20を原則とし、カマド等については縮尺1/10で実測している。写真撮影にあたっては、デジタル一眼レフカメラ（2400万画素）を使用し、適宜、記録撮影を実施し、JPEGとRAWデータを保存している。

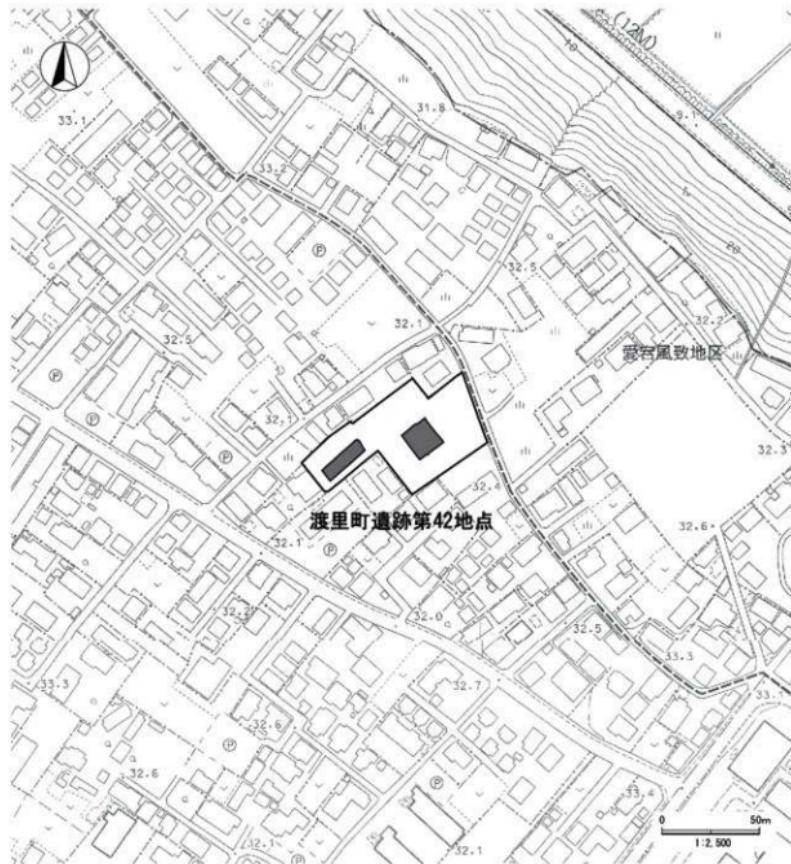
第3節 整理作業の経過

整理作業は、令和4年4月から10月まで行った。4月から遺物洗浄、注記、接合・復元作業を実施し、次いで6月には遺物実測作業を進めた。また、併行して5月から写真整理、遺構図の編集を実施。7月には遺物トレース作業、遺物写真撮影、図版作成、原稿執筆作業を進め、8月に報告書編集作業を行った。その後、校正を重ね、令和4年10月に報告書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

渡里町遺跡第42地点は、水戸市渡里町字小山ノ上2469番、2470番1、2471番1に所在する。渡里地区は、北を那珂川に、南を桜川に挟まれた通称「上市台地」と呼ばれる那珂川により形成された河岸段丘上に位置し、南北方向に流れていた那珂川が渡里地区付近で緩やかに東方向へ流路を変えている（第1図）。この「渡里」という地名も渡河点と関連する地名とみられる。低地との比高差は約30mであり、上市台地の東斜面には愛宕町滝坂の曝井推定地に代表される湧水地が点在し、水の利用が容易である。今回の調査地点は、那珂川が東へ蛇行する場所から南西方向へ入り込む谷津の南東側の台地上である。



第2図 調査区位置図 (1/2,500)

第2節 歴史的環境

渡里町遺跡は、水戸市北東部に位置し、北西側に国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」、南東側に国指定史跡「愛宕山古墳」がある。那珂川を見下ろす台地縁辺部に沿って広がっており、その範囲は東西約150m、南北約700mにも及ぶ（第2図）。かつてこの一帯には畠地が広がり、雜木林が点在していたが、昭和40年代後半から宅地化が進み、往時の景観が失われつつある。渡里町遺跡が立地する那珂川流域の台地上には旧石器時代から近代に至るまで多くの集落跡・古墳・横穴墓、寺院跡・官衙跡、城館跡が確認されている（第2図、第1表）。以下では周辺の遺跡を概観する。

縄文時代の遺跡は、アラヤ遺跡（024）、砂川遺跡（224）、白石遺跡（225）、台渡里官衙遺跡群（276）など、本遺跡（121）も含め多数あるが調査例は少ない。アラヤ遺跡では早期後葉茅山下層式期から晩期中葉千綱式期の遺構・遺物が検出され、那珂川支流の田野川沿いに広がりをみせる。本遺跡の別地点でも早期稻荷原式期から中期後葉加曾利E式期の堅穴建物跡や土坑、遺物などが多数検出されている。特に遺跡中央部から南側にかけ、中期中葉阿玉台式期から加曾利E式期を中心とした時期の遺構や遺物が顕著である。砂川遺跡からは、中期後葉加曾利E式期の堅穴建物跡などが多数検出され、同一集落内で平面形状が円形、隅丸方形、梢円形がみられ、炉の形態も地床炉、石囲い炉、埋設炉と多様である。白石遺跡からは、加曾利E式期の堅穴建物跡が数棟検出されている。台渡里官衙遺跡群の北西側では、後期前葉堀之内式期から中葉加曾利B式期の遺物が多量に出土し、集落の存在が想定される。

弥生時代の遺跡は、土器などの散布地が知られる程度で全容が不明瞭な遺跡が占める。調査例としては堀遺跡（064）があり、堅穴建物跡から弥生時代末から古墳時代初頭の壺や壇が出土している。

古墳時代の遺跡としては、集落跡で文京1丁目遺跡（023）、中河内遺跡（065）、堀遺跡、台渡里廃寺跡（098）、白石遺跡、台渡里官衙遺跡などが知られる。台渡里廃寺跡や台渡里官衙遺跡の成立期とみられる7世紀後半、古墳時代終末期には、本遺跡や掘遺跡など周辺部において、その関連集落が広く展開していたことが確認されている。他に白石遺跡などでも同時期の堅穴建物跡が検出されている。台渡里官衙遺跡の南方、南前原地区では、7世紀前葉とみられる幅7m程、深さ3m程の方形区画溝が検出されており、豪族居館もしくは、評段階の初期官衙である可能性が指摘されている。それ以前の前期から後期の集落跡は文京1丁目遺跡、堀遺跡、中河内遺跡、台渡里官衙遺跡などで遺構や遺物がわずかに確認されているがその全容は不明瞭である。集落跡の周辺に営まれた古墳や古墳群としては、愛宕山古墳群（079）、西原古墳群（080）、小原内古墳群（097）、塚宮古墳群（126）、白石古墳群（226）、上河内大塚古墳（228）、一本松古墳（229）、笠原神社古墳（230）がある。消滅してしまった古墳も多いが中期～終末期のものが確認されている。中期には国指定史跡愛宕山古墳や、すでに失われた姫塚古墳が築造されている。愛宕山古墳は椭形の周塚を巡らす大型の前方後円墳で、5世紀前葉に築造されたと考えられる。後期の小原内古墳群では埴輪が伴い、6世紀代の築造と想定されている。終末期古墳は白石古墳群や西原古墳群などで、西原古墳群は前方後方墳1基と円墳11基から構成される古墳群であるが、水戸市教育委員会などの調査で、前期から形成され、7世紀まで造墓活動が継続する古墳群と考えられている。白石古墳群は5基の円墳から構成され、埴輪を伴っていない。凝灰岩片が散乱している古墳が存在することから、横穴式石室を持つ古墳が含まれると考えられる。

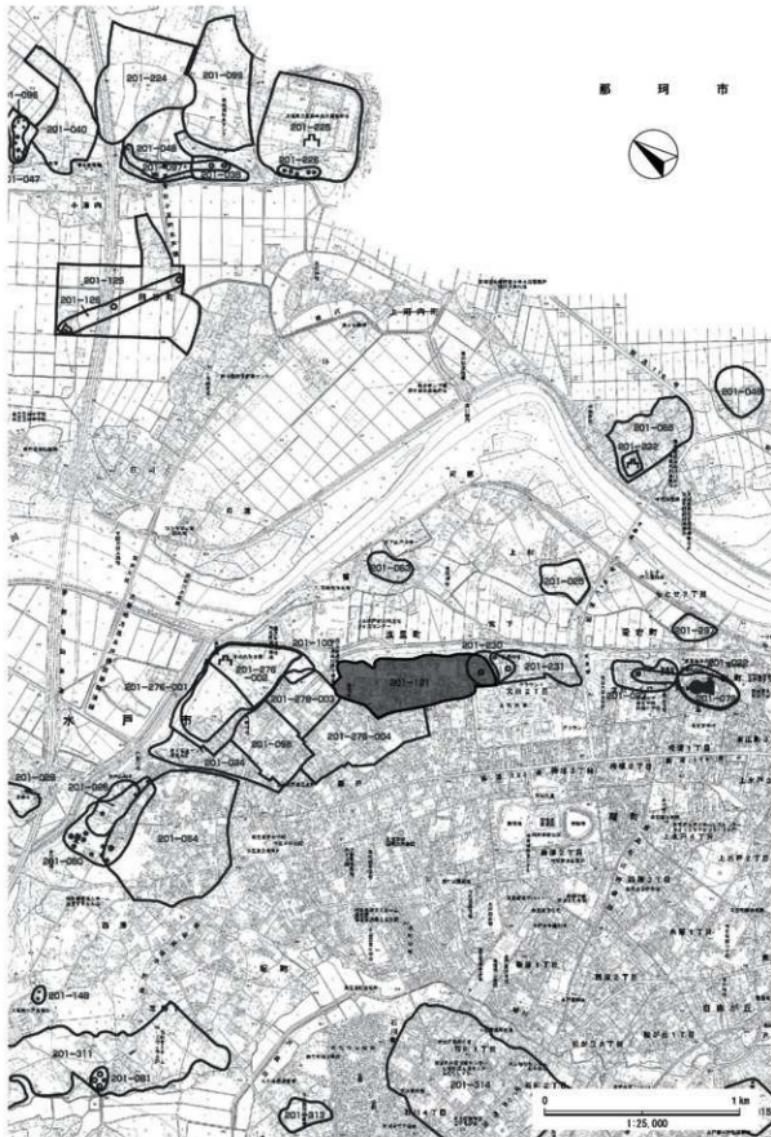
奈良・平安時代の遺跡は文京1丁目遺跡、アラヤ遺跡、西原遺跡（026）、小原内遺跡（048）、中河内上坪遺跡（049）、東町遺跡、茨城高等学校遺跡、坪渡里遺跡（063）、堀遺跡、台渡里廃寺跡、田谷遺跡（099）、砂川遺跡、白石遺跡、文京2丁目遺跡（231）、台渡里官衙遺跡、高野下遺跡（311）、野田原遺跡（313）、西堀原遺跡（314）、本遺跡が該当する。国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」を中心に、

本遺跡も含め、その周辺では関連遺跡が数多く確認されている。

台渡里廃寺跡は過去に長者山地区と観音堂山地区、南方地区の3地区に分けられ、このうち長者山地区は平成18年度の水戸市教育委員会の発掘調査において、9棟の礎石建物跡と北側区画溝が検出され、寺院ではなく、那賀郡衙に伴う正倉院であることが確認されている。観音堂山地区については、平成14年から16年にかけて水戸市教育委員会が行った範囲確認調査の結果、推定範囲東西126m、南北156mの寺院地内から、西側に講堂が、その北東に金堂とさらに東側に塔が並び、金堂の北西に経蔵もしくは鐘楼と考えられる礎石建物が配置され、講堂の対極には中門が配置される東向きの独自の伽藍配置をもつものと想定され、その創建年代が7世紀後半から7世紀末に遡ることが明らかとなった。南方地区は範囲確認調査の結果、推定範囲東西220～240m、南北210m以上の寺院地内に塔跡、金堂跡が想定される礎石建物跡が2棟確認され、9世紀後半に造営された法隆寺式伽藍配置を意識した寺院であることが判明した。観音堂山地区の初期寺院が9世紀後半には火災で廃絶している。観音堂山地区の伽藍の焼失後、南方地区に再建されたものとみられているが10世紀初頭にはその機能が停止している。遺物では多量の瓦に加え、相輪の一部がヘラ描きされた瓦や「佛」という字の周りに絵が描かれた瓦、仏像の鋳型、塑像、金箔製品、瓦製相輪の請花花弁と擦管など仏教関連遺物が出土している。また、「徳輪寺」、「仲寺」といった文字資料も確認されている。これらの成果に基づき、平成17年には観音堂山地区と南方地区が国指定史跡に指定されている。それに伴い、台渡里廃寺跡および旧台渡里遺跡は名称変更が行われ、台渡里廃寺跡・台渡里官衙遺跡の長者山地区、宿屋敷北地区、宿屋敷地区、南前原地区となっている。白石遺跡からは、堅穴建物跡16棟、掘立柱建物跡6棟、基壇1基、溝1条、土坑12基が検出されている。特に注目されるのは東西2間、南北36間のII区2号建物であり、第1号溝とともに官衙関連施設の一部を構成していたと考えられ、溝の時期から8世紀前半に帰属するものとみられている。白石遺跡に隣接する田谷廃寺跡からは、台渡里官衙遺跡長者山地区と同様の文字瓦が多数出土し、小字には「百壇」という礎石建物の基壇との関係が推測される地名が遺されており、3箇所の基壇と礎石の存在が報告されている。このことから田谷廃寺跡が河内駅家跡であると指摘され、II区2号建物が駅馬を繋いでおくための馬房や厩舎などの施設である可能性も想定されている。

官衙の周辺集落と考えられるアラヤ遺跡では堅穴建物跡と共に、工房跡や粘土採掘坑などが検出され、那賀郡衙正倉院の区画溝やそれに伴う掘立柱建物跡も確認されている。また、堀遺跡では、数多くの堅穴建物跡や掘立柱建物跡、溝、井戸、土坑などが検出されている。平成6年の調査において検出された掘立柱建物跡は長舍風の建物跡で9世紀代の官衙的な建物の可能性が指摘されている。遺物は須恵器壺G・人面墨書土器・窯・雁又鐵・釣針・釘・くるり鉢など多種多様なものが出土している。白石遺跡の北側に位置する砂川遺跡においても、該期の堅穴建物跡や溝、井戸が検出され、井戸からは木製の曲物や櫛、高台付盤などが出土している。

中世以降の遺跡は台渡里廃寺跡、長者山城跡(100)、中河内城館跡(232)、などが挙げられる。長者山城跡は中世の居館跡で江戸氏の重臣である河和田城主春秋氏の支城で、その縄張りの一部となるアラヤ遺跡や台渡里廃寺跡、台渡里官衙遺跡などからは、地下式坑や井戸、瓦礫道、土坑、ピットなどの遺構や15世紀後半から16世紀初頭のカワラケや内耳土鍋、擂鉢などが出土している。また、アラヤ遺跡や台渡里廃寺跡などでは17世紀前半以降の陶磁器が出土しており、近世の痕跡も確認されている。



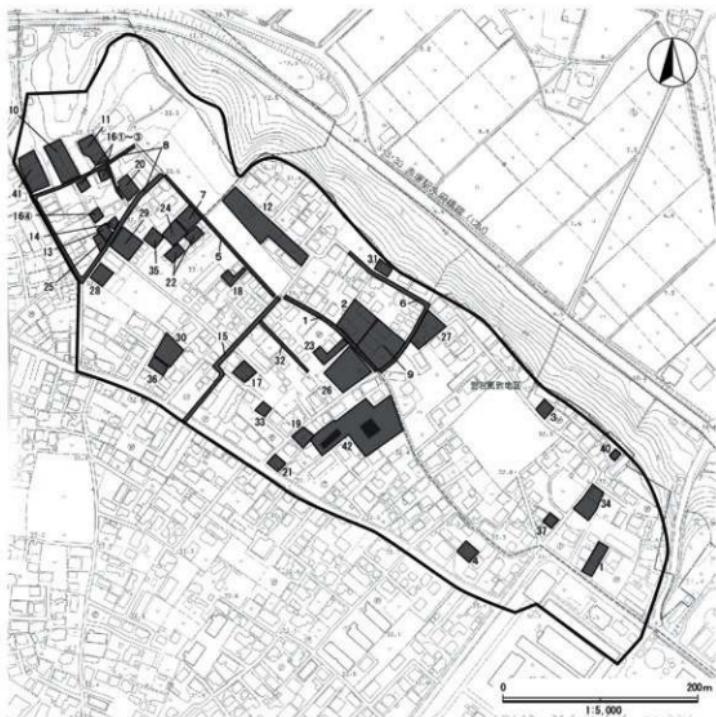
第3図 渡里町遺跡と周辺の遺跡位置（茨城県遺跡地図 1/25,000「水戸」に加筆）

第1表 渡里町遺跡と周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	種類	時代・時期						備考	
			旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世	
021	並松町遺跡	集落跡	○							
022	愛宕町遺跡	集落跡	○	○	○					
023	文京1丁目遺跡	集落跡	○	○	○	○				
024	アラヤ遺跡	集落跡	○		○	○				
025	上杉遺跡	包蔵地								
026	西原遺跡	集落跡		○		○				
029	安戸星遺跡	集落跡		○	○					
038	梵天遺跡	集落跡	○	○	○					
040	平塚遺跡	集落跡	○	○						
047	富士山遺跡	集落跡	○							
048	小原内遺跡	集落跡	○	○		○				
049	中河内上坪遺跡	集落跡		○	○	○				
063	坪渡里遺跡	集落跡			○	○				
064	堀遺跡	集落跡		○	○	○			H 5～7 調査	
065	中河内遺跡	集落跡			○	○				
079	愛宕山古墳群	古墳群			○					前方後円墳2（愛宕山古墳は国指定史跡），円墳2一部湮滅
080	西原古墳群	古墳群			○					前方後円墳1，円墳11一部湮滅
081	堀町面古墳	古墳群			○	○				円墳1
096	富士山古墳群	古墳群		○	○					前方後円墳1，円墳8
097	小原内古墳群	古墳群			○					前方後円墳1，円墳4一部湮滅
098	台渡里麻寺跡	寺院跡	○	○	○	○	○	○		国指定史跡
099	田谷遺跡	官衙跡				○				
100	長者山城跡	城館跡					○			
121	渡里町遺跡	集落跡	○		○	○				
125	塚宮遺跡	集落跡	○	○	○					
126	塚宮古墳群	古墳群			○					前方後円墳1，円墳2湮滅
148	山田A古墳群	古墳群			○					円墳1，一部湮滅
224	砂川遺跡	集落跡	○			○				S 55・56 調査
225	白石遺跡									
226	白石古墳群									
230	笠原神社古墳	古墳群	○		○					円墳3一部湮滅
231	文京2丁目遺跡	集落跡		○	○	○				
232	中河内城館跡	城館跡					○			
276	台渡里官衙遺跡	官衙跡	○	○	○	○		○		
297	ちとせ2丁目遺跡	包蔵地								
311	高野下遺跡	包蔵地								
313	野田原遺跡	包蔵地				○				
314	西堀原遺跡	包蔵地				○				

第3節 渡里町遺跡における既往の調査

渡里町遺跡が立地する渡里地区の台地上では、これまでに41地点の調査が行われているが、その多くが小規模な調査で占められ、盛土保存や工事立会となっているために本発掘調査が行われた地点は少ない。平成20年に行われた第6地点では、縄文時代中期の堅穴建物跡や土坑が、本地点の東側に位置する同年に行われた第5地点では、平安時代を中心に堅穴建物跡6棟、溝2条などが検出されている。平成24年に実施された第12地点第2次調査では、約2,200m²の範囲に縄文時代から平安時代の堅穴建物跡41棟、掘立柱建物跡7棟、溝跡3条、道路状遺構1条、土坑49基、ピット360基、性格不明遺構10基と多くの遺構が検出されている。平成26年実施の第22地点においても、狭い範囲に密集して、7世紀後半から10世紀にかけての堅穴建物跡14棟や掘立柱建物跡2棟が検出されている。これらの各地点では円面鏡や瓦、墨書き土器、灰釉陶器などの寺院や官衙に関連するとみられる遺物が多数出土している。(第3図)



第4図 渡里町遺跡の範囲と既往の調査地点（水戸市都市計画区域図1/5,000に加筆）

第2表 既往の調査一覧表（1）

地點番号	調査次數	所在地	調査期間	調査種別	調査原因	遺構	遺物	備考
1		渡里町字八幡前 2565 番 1 地先～ 2592 番 4 地先（市道常磐 1 号線）	平成 15 年 7 月 27 日～ 9 月 10 日	立	公共下水道工事	○	○	
2	1	渡里町字八幡前 2568 番 3	平成 15 年 6 月 13 日	試	集合住宅	○	○	
	2		平成 15 年 8 月 9 日～ 8 月 10 日	本	集合住宅	○	○	
3		渡里町 2403-7	平成 18 年 11 月 9 日	試	個人住宅	○	○	
4	1	渡里町 2373-3	平成 19 年 11 月 13 日	試	個人住宅	○	○	
	2		平成 20 年 4 月 1 日	立	個人住宅	—	—	
5	1	渡里町 2595-1 地先～ 2598-9 地先（市道常磐 31 号線）	平成 20 年 3 月 24 日	本	道路改良	○	○	2008 水戸市教委刊行
6		渡里町 2590-4 地先～ 2568-1 地先（市道常磐 34, 275 号線）	平成 20 年 4 月 7 日	本	道路改良	○	○	2008 水戸市教委刊行
7	1	渡里町 2598-4	平成 20 年 3 月 24 日	試	個人住宅	—	○	
	2		平成 20 年 5 月 1 日	立	個人住宅	—	○	
8		渡里町字前原 2821 番 1 地先～ 2796 番 21 地先、字前原 2598 番 11 地先～ 2796 番 21 地先、字前原 2800 番地先～ 2796 番 15 地先、字前原 2799 番 1 地先～ 2796 番 19 地先（市道常磐 23, 31, 307 号線）	平成 21 年 4 月 3 日～ 5 月 29 日	本	公共下水道工事	○	○	2009 水戸市教委刊行
9		渡里町 2568-1	平成 21 年 1 月 15 日	試	共同住宅	○	○	
10		渡里町字前原 2819-1	平成 21 年 7 月 13 日～ 15 日	試	集合住宅	○	○	
11		渡里町 2819-4, -5	平成 22 年 5 月 21 日	試	共同住宅	○	○	
12	1	渡里町 2593-1	平成 22 年 8 月 3 日	試	宅地造成	○	○	
	2	渡里町 2593-1, 4, 5, 6	平成 24 年 4 月 24 日	本	個人住宅	○	○	
13		渡里町 2796-19	平成 23 年 4 月 1 日	試	個人住宅	—	—	
14		渡里町 2796-38	平成 23 年 5 月 6 日	試	個人住宅	—	—	
15		渡里町 2567 番地先～ 2604 番地先（市道常磐 212 号線）	平成 23 年 5 月 16 日～ 6 月 4 日	本	道路改良	○	○	
16	1	渡里町 2796-3	平成 23 年 10 月 6 日	試	宅地造成	○	○	
	2	渡里町 2796-3, 17, 18 の一部（第 16 地点区画 No.1）	平成 23 年 10 月 6 日	試	個人住宅	—	—	
	3	渡里町 2796-3, 17, 18, 39 の一部（第 16 地点区画 No.2）	平成 23 年 10 月 6 日	試	個人住宅	—	—	
	4	渡里町 2796-3, 17, 18, 39 の一部（第 16 地点区画 No.3）	平成 23 年 10 月 6 日	試	個人住宅	—	—	
17		渡里町 2561-7, 2561-8	平成 23 年 12 月 14 日	試	集合住宅	○	○	
18		渡里町 2595-8, 23	平成 24 年 7 月 11 日	試	個人住宅	○	○	
19		渡里町 2464-2	平成 25 年 8 月 21 日	試	個人住宅	○	○	

第3表 既往の調査一覧表（2）

地點番号	調査次數	所在地	調査期間	調査種別	調査原因	遺構	遺物	備考
19		渡里町 2464-2	平成 25 年 8 月 21 日	試	個人住宅	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
20		渡里町 2797-1	平成 27 年 3 月 17 日	試	共同住宅	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
21		渡里町 2465-4	平成 27 年 6 月 2 日	試	個人住宅	—	—	
22	1	渡里町 2595-1, 5, 6, 7	平成 27 年 6 月 9 日	試	共同住宅	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
	2	渡里町 2595-1, 5, 6, 7	平成 27 年 8 月 26 日 ～9 月 30 日	本	共同住宅	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	2016 水戸市教委刊行
23		渡里町 2567-11, 13	平成 27 年 7 月 23 日	試	共同住宅	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
24		渡里町 2598-2, 3	平成 27 年 9 月 29 日	試	個人住宅	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
25		渡里町 2796-1	平成 28 年 4 月 5 日	試	個人住宅	—	<input type="radio"/>	
26		渡里町 2565-1	平成 28 年 8 月 17 日	試	宅地分譲	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
27		渡里町 2458-1	平成 28 年 9 月 15 日	試	個人住宅	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
28		渡里町 2600-1	平成 28 年 10 月 12 日	試	個人住宅	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
29		渡里町 2600-2	平成 28 年 12 月 21 日	試	建充分譲	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
30		渡里町 2606-1	平成 29 年 1 月 24 日	試	不動産鑑定	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
31		渡里町 2570-1	平成 29 年 4 月 28 日	試	建壳住宅	—	—	
32	1	渡里町 2567-2・8 地先（私道）	平成 29 年 8 月 9 日	立	公共下水道工事	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
	2		平成 29 年 12 月 19 日 ～平成 30 年 1 月 31 日	本		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	2018 水戸市教委刊行
33		渡里町 2560-1	平成 30 年 3 月 22 日	試	個人住宅	—	<input type="radio"/>	
34		渡里町 2417-3・10	令和元年 5 月 30 日	試	建壳住宅	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
35		渡里町 2599-1	令和元年 7 月 24 日	試	個人住宅	—	<input type="radio"/>	
36		渡里町 2606-11	令和元年 10 月 9 日	試	個人住宅	—	<input type="radio"/>	
37		渡里町字小山ノ上 2425-3	令和 2 年 1 月 15 日	試	個人住宅	—	<input type="radio"/>	
38		渡里町（ヨーポ寺内 B 付近）	平成 24 年 3 月 21 日	立	公共下水道工事	<input type="radio"/>	—	
39	1	渡里町地内	平成 25 年 2 月 14 日	立	公共下水道工事	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
	2	渡里町地内	平成 25 年 4 月 17 日	立	公共下水道工事	<input type="radio"/>	—	
40		渡里町 2416-2	令和 3 年 7 月 28 日	試	個人住宅	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
41		渡里町 2618-2・3	令和 3 年 9 月 10 日	試	建壳住宅	—	<input type="radio"/>	
42	1	渡里町 2469, 2470-1, 2471-1	令和 3 年 11 月 30 日	試	学生寮建設	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
	2	渡里町 2469, 2470-1, 2471-1	令和 4 年 3 月 3 日 ～4 月 6 日	本	学生寮建設	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	本報告書

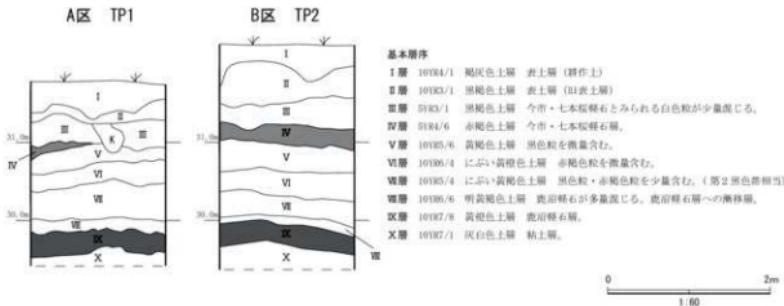
第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は堅穴建物跡3棟、溝状遺構3条、土坑2基、ピット15基で、主な出土遺物は遺構に伴う須恵器・土師器を主体として、他に縄文土器・石器が多く出土している。収納箱2箱（整理箱容量：縦54cm×横34cm×深さ15cm），總重量で13,205.3g，總点数569点である。調査面積は410m²、調査対象地は二箇所に分かれており、便宜上、西側調査区をA区、東側調査区をB区としている。現地表から遺構確認面までの深さは概ね60cmで、原地形はわずかに南西へと傾斜している。遺構の分布に偏重はみられないが、B区では耕作に伴うトレレンチャーが北東から南西へ並走し、ローム層に達しており、各遺構も擾乱を受けている。検出遺構の時期は奈良・平安時代を中心で、近世以降のものも見受けられる。表土中に含まれる遺物は少ないが、縄文時代の遺物は遺構未検出のB区で顕著であり、中期の土器が多くを占める。今回検出された奈良・平安時代の遺構は、国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」である那賀郡衙・郡寺との関連性の高い渡里町遺跡に展開する周辺集落の一部とみられる。

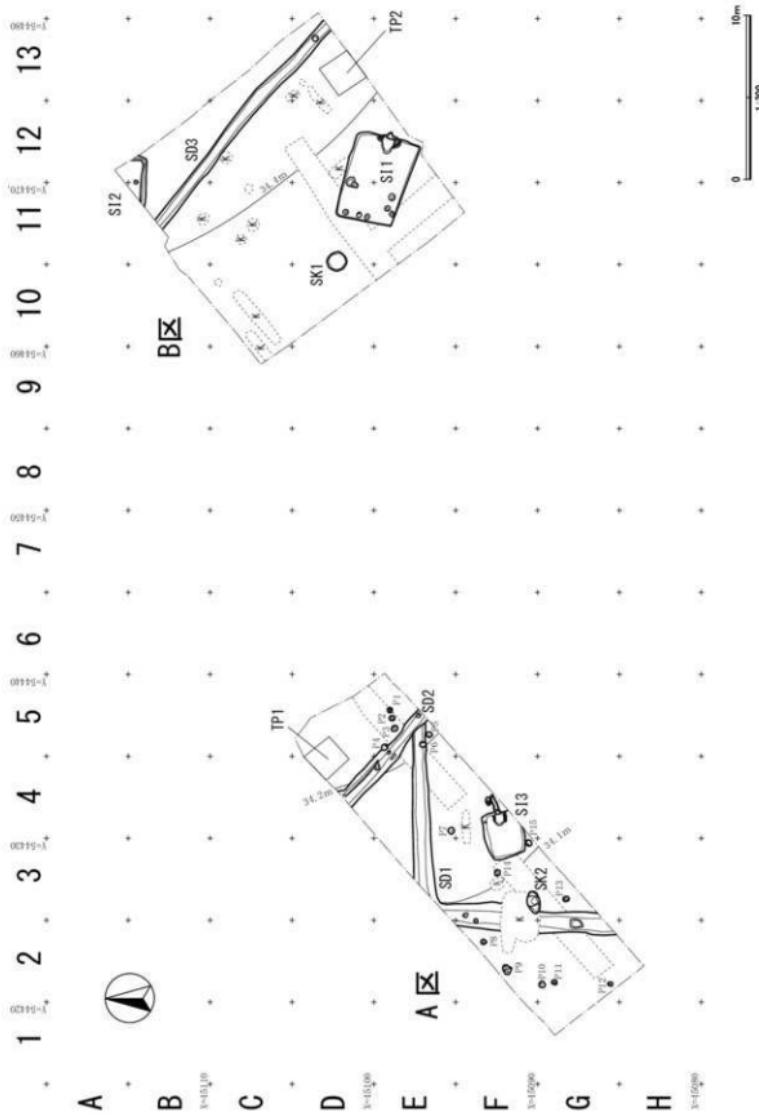
第2節 基本層序

基本層序は、各調査区に1箇所、A区北東側のD-4・5グリッドのTP1と調査区B区東側のD-13グリッドのTP2の2箇所で基本土層確認のためのテストピットを設け、観察を実施している（第5図、図版7）。表土層は耕作地であり、B区のトレレンチャーはローム層にまで達していた。現地表より約60cmでローム層上面に達し、TP1ではそこから更に約160cm下が、TP2ではそこから更に約210cm下が、鹿沼軽石層の下位の粘土層に達した。旧石器時代の遺物は検出されず、今回の調査区全体でも出土していない。



第5図 基本層序

第6図 全体図



第3節 検出された遺構と遺物

(1) 穴穴建物跡

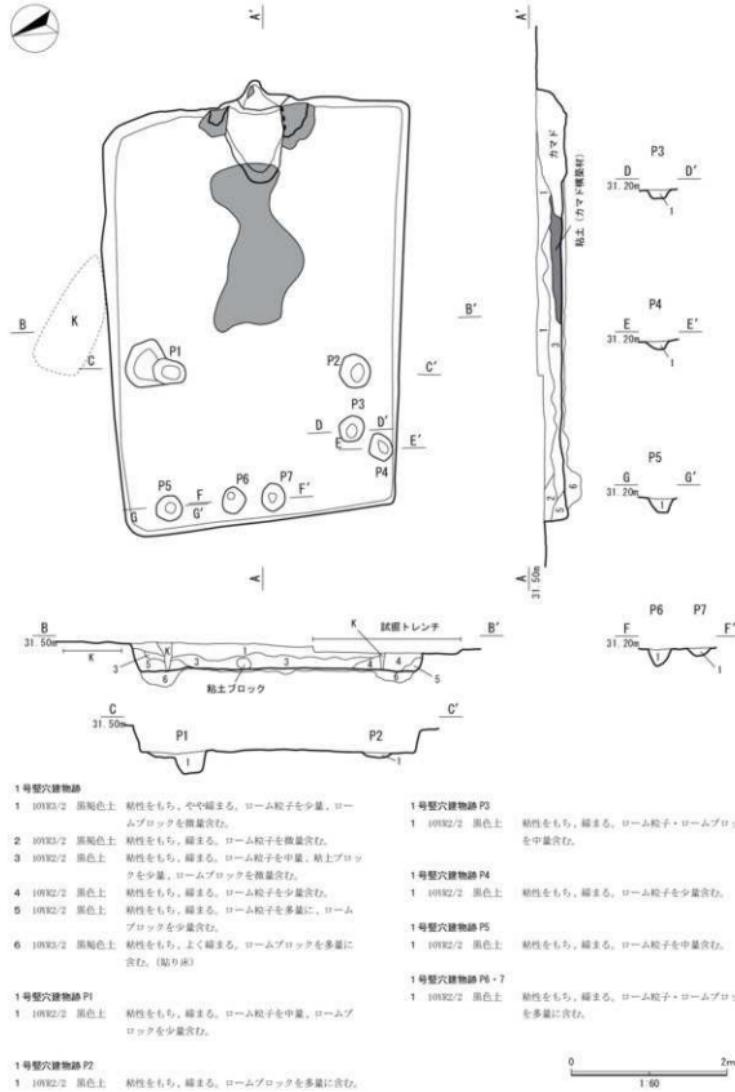
1号穴穴建物跡（第7～10図、第4・5表、図版2・3・8）

調査区B区のD・E-11・12グリッド、今市・七本桜蛭石層より10cm程上位にて検出された。耕作に伴うトレッチャが覆土に達しており、一部が擾乱されている。平面形状は長方形を呈する。規模は長辺が5.3m、短辺が3.8mを測る。確認面からの深さは31cmで、カマドを中心とした主軸方向はN=108°-Eを示す。面積はおよそ20.14m²である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面はほぼ平坦で顕著な硬化面はみられないが、全体的にやや硬化した状況であった。貼り床は中央部が薄く、外縁部が厚い。南から東側にかけ壁際がやや深く掘り込まれており、掘り方は起伏をもつ。最大で21cm程の貼り床が施されている。ピットは床面より7基を検出している。規則的に配置されるP1・2は主柱穴とみられ、P1は最大径43cmで南側に浅い掘り込みが伴い、深さ26cm、P2は最大径42cm、深さ6cmを測る。P3は最大径36cm、深さ11cm、P4は最大径38cm、深さ10cm、P5は最大径34cm、深さ18cm、P6は最大径35cm、深さ10cm、P7は最大径36cm、深さ21cmを測る。その位置からP6とP7は出入口に関するピットの可能性がある。カマドは東壁中央に付設され、全長は130cm、壁からの掘り込みは短く32cm程である。両袖が一部残存し、カマド内部は奥行き73cm、幅72cm程である。カマド前面に粘土が検出されており、カマド構築材とみられ、使用停止後に人为的に壊されているものと想定される。火床面はほとんど残されておらず、袖の一部でわずかに被熱痕が認められた。被熱痕からは、よく使用されていたものと推測される。

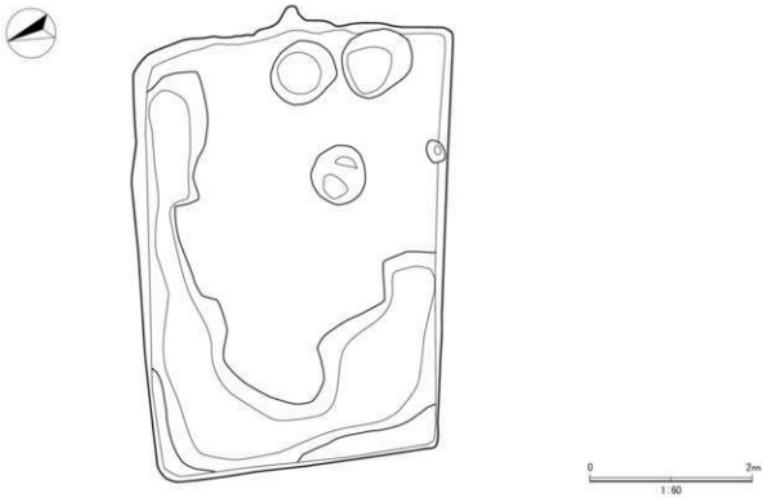
覆土は含有物の違いなどにより5層に分層され、黒色土・黒褐色土を主体とし、自然堆積を呈するものと判断される。壁溝は検出されなかつた。

本遺構に伴う遺物は少なく限られ、須恵器、土師器の細片がカマド周辺で出土している。また、カマド前庭部にはカマド構築粘土が纏まって検出された。出土遺物は総重量で3,608.0g、総点数で62点の遺物が出土している。多くは混入した縄文土器片で占められ、40点、740.4gが出土している。これらのうちいずれも細片ではあるが6点を図示した。1は須恵器坏で、少量だが海綿骨針が含まれることから木葉下窓跡群の製品とみられる。2は須恵器の高台付坏の底部から高台部である。3は内面黒色処理が施された土師器坏である。4は外面に丁寧なナデ調整が施され、肩部がやや張りを持つ。口縁部が未検出であるが「常陸型甕」とみられる。5は細片ではあるが胎土が堅密であり灰釉陶器とみられる。肩部の径から壺類のものと考えられる。6は縄文時代の磨石とみられるが、残存するカマド袖部より出土しており、カマド構築材として再利用されたものとみられる。カマド周辺には他にも2点ほど拳大の石が出土しており、これらも同様にカマド構築材の一部であったとみられる。

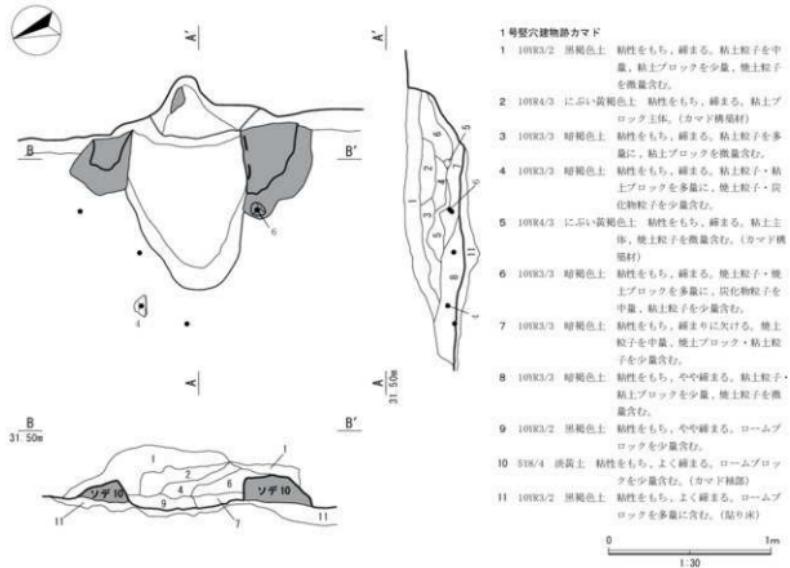
本遺構の時期はわずかな出土遺物から判断すれば、おおよそ8世紀後葉から9世紀前葉を主とする時期とみられ、やや新相を示す。



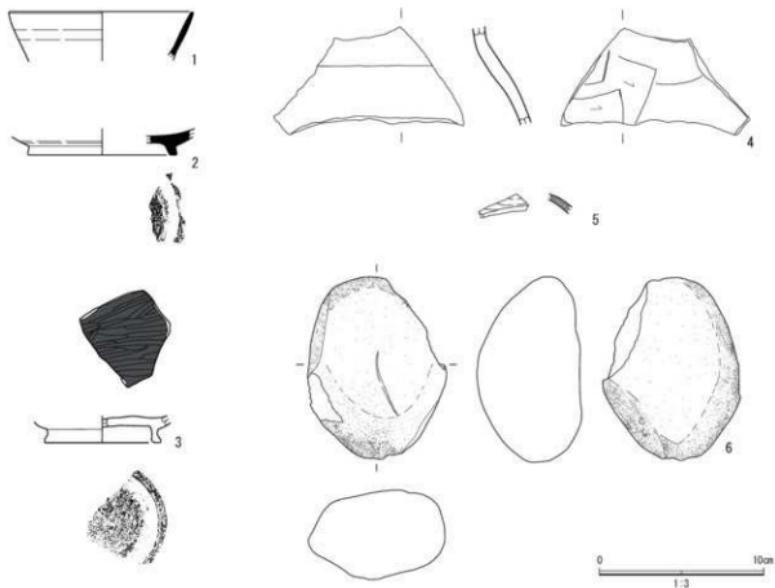
第7図 1号竖穴建物跡



第8図 1号竖穴建物跡掘り方



第9図 1号竖穴建物跡カマド



第10図 1号竖穴建物跡出土遺物

第4表 1号竖穴建物跡出土土器属性一覧

査査番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	施土	焼成	色調	備考
1	SII 一柄	須恵器	36	口縁部 ~体部	縞片	(11.0)	—	(3.1)	ロクロ成形。	白色粒子。 黒色粒子・石英・ 砂粒・海綿骨粉	良好	内外面 刻4/1 灰色	
2	SII 一柄	須恵器	高台 付灰	底部 ~高台部	縞片	—	(9.0)	(1.6)	ロクロ成形。回転ヘラケズ リ後、高台部貼り付け。	白色粒子。 黒色粒子・石英・ 小穀	良好	内外面 2.5YR4/1 黄灰色	
3	SII 一柄	土師器	高台 付灰	体部 ~底部	縞片	—	(7.0)	(1.6)	内面黒色處理。ヘラミガキ。 ロクロ成形。回転ヘラケズ リ後、高台部貼り付け。	白色粒子・石英	良好	外 5YR4/3 に沿い赤褐色 内 7.5YR2/1 黑色	
4	SII カマド	土師器	甕	胴部	縞片	—	—	(6.0)	外面ナグ。内面ヘナダ。	白色粒子。 黒色粒子・石英・ チャート・雲母	良好	外 7.5YR5/6 明褐色 内 10YR5/6 黄褐色	
5	SII 一柄	灰釉 壺・瓶	瓶部	縞片	—	—	(1.2)	ロクロ成形。堅縛。	白色粒子。 黑色漂出物	良好	外 2.5Y6/1 黄灰色 内 2.5Y7/1 褐白色		

第5表 1号竖穴建物跡出土石器・石製品属性一覧

査査番号	出土地点	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴・手法	備考
6	SII カマド	石器	滑石	11.2	8.4	5.5	651.7	ほぼ完形。全面が磨り面となり、よく使用されている。調査断面を軸用し、カマド構造材に利用。	疑灰岩

2号竖穴建物跡 (第11-12図、第6表、図版3・4・8)

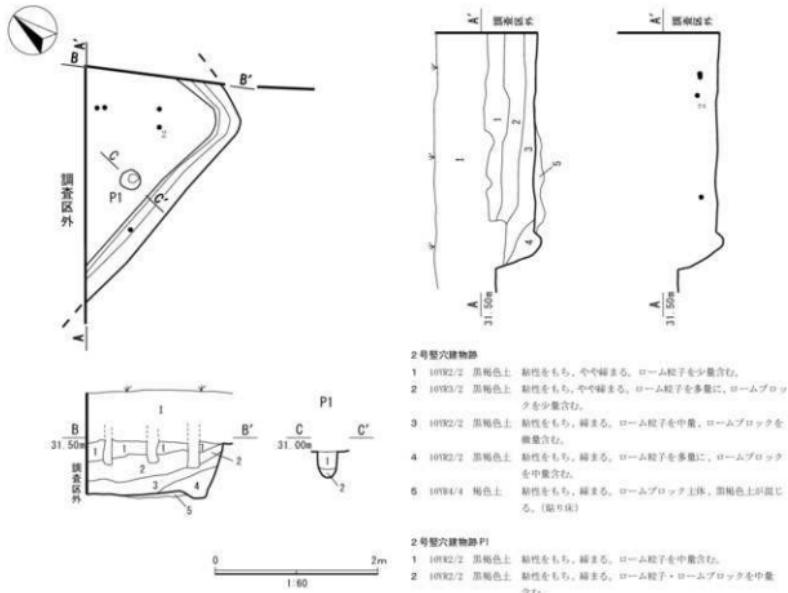
調査区B区のA・B・11・12グリッド、今市・七本桜軽石層より10cm程上位にて、南壁及び南東隅の部分のみが検出された。多くが調査区外となり全容は不明瞭である。1号竖穴建物跡と同様に耕作に伴うトレンチャーが覆土に達しており、一部が攪乱されている。平面形状は不明であるが、およそ正方形と推測される。規模は検出範囲で、東西が3.2m、南北が1.9mを測る。確認面からの深さ

は66 cmで1号竪穴建物跡に比して深い。カマドを中心とした主軸方向はN-1°-Wでほぼ北を示す。ピットは床面より1基を検出している。P1は最大径25 cm、深さ32 cmを測る。その位置からP1は出入口に関連するピットの可能性がある。P1が東西方向で中心に位置するならば、幅はおよそ2.2 m、面積はおよそ4.84 m²ほどである可能性が想定される。壁は緩やかに開いて立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、全体的にやや硬化した状況が認められる。貼り床は中央部側が薄く、外縁部がやや厚い状況がみられたが、掘り方に顕著な起伏は認められなかった。最大で13 cm程の貼り床が施されている。カマドはP1が出入口施設であるならば、北壁側に付設されている可能性が高い。カマドの構築材粘土などは検出していない。

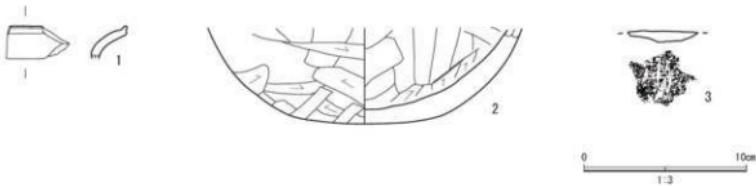
覆土は含有物などの違いにより4層に分層され、黒褐色土を主体とし、自然堆積を呈するものと判断される。壁構は検出範囲では全周しており、幅30 cm程、深さ10 cm前後を測る。

本遺構に伴う遺物は検出範囲も限られ少ない。出土位置に偏在性はみられない。総重量で433.0 g、総点数で15点の遺物が出土している。須恵器、土師器の細片が少量と1号竪穴建物跡同様に繩文土器片が混入している。そのうちいずれも細片ではあるが3点を図示した。1は土師器甕で、細片ではあるが口縁部の形状から「常陸型甕」と判断される。2は土師器甕の胴部下半から底部片で、比較的小型で底部が明瞭な稜を有さない丸底となる。3は土師器甕の底部とみられるが底面には焼成前に刻まれた「廿」の字状のヘラ書が認められる。

本遺構の時期は少ない出土遺物からの判断は困難であるが、おおよそ8世紀後葉から9世紀前葉を主とする時期とみられ、やや古相を示す。



第11図 2号竪穴建物跡



第12図 2号竪穴建物跡出土遺物

第6表 2号竪穴建物跡出土土器属性一覧

掲載番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	施土	構成	色調	備考
1	S12 一括	土器	甕	口縁部	細片	—	—	<1.0	ロクロ成形。	白色粘土・石英・チコート・小礫	良好	外: 10YR5/6 黄褐色。 内: 10YR6/4 にぶい褐色	「常陸型甕」
2	S12 覆土	土器	甕	肩部 ~底部	細片	—	—	<5.0	ロクロ成形。底部外縁部回転ヘラケズリ。	白色粘土・石英・チコート・小礫	良好	外: 7.5YR3/2 黑褐色	
3	S12 一括	土器	甕	底部	細片	—	—	<0.7	内外面ヨコナダ。	白色粘土・チコート・砂粒・小礫・海綿骨片	良好	外: 7.5YR5/4 にぶい褐色。 内: 10YR5/4 にぶい黄褐色	施成前ヘラ 素「せ」カ

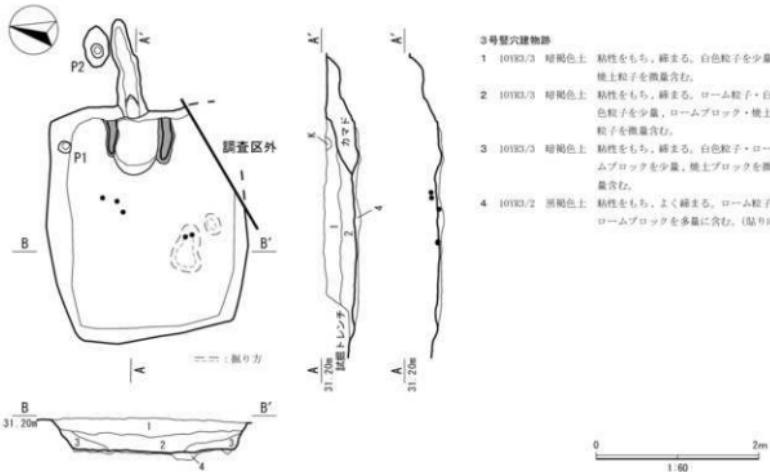
3号竪穴建物跡（第13～15図、第7・8表、図版4・5・8・9）

調査区A区のF-3・4グリッド、今市・七本桜軽石層より20cm程上位にて検出された。一部が調査区外となる。平面形状は長方形を呈する。規模は長辺が2.9m、短辺が2.4mを測る。確認面からの深さは39cmで、カマドを中心とした主軸方向はN-78°-Eを示す。面積はおよそ6.96m²である。壁は外側に開いて立ち上がっている。床面はほぼ平坦で顕著な硬化面はみられないが、全体的にやや硬化した状況であった。貼り床は全体的に薄く、掘り方は一部に掘り込みもあるが概ね平坦である。最大で7cm程の貼り床が施されている。ピットは北東隅の壁際で1基を検出している。P1は最大径16cm、深さ15cmを測る。また竪穴外となるが煙道横でP2を検出している。本遺構に伴うものかは不明瞭ではあるが覆土は類似する暗褐色土を主体とし、最大径51cm、深さ40cmを測る。カマドは東壁中央に付設され、全長は191cm、壁からの掘り込みは煙道も含め極めて長く110cm程である。両袖が一部残存し、カマド内部は奥行き68cm、幅48cm程である。火床面は残されておらず、袖の一部や底面でわずかに被熱痕が認められた。被熱痕からはよく使用されていたものと推測される。カマド内には纏まつた土師器片と共に土製支脚が出土している。

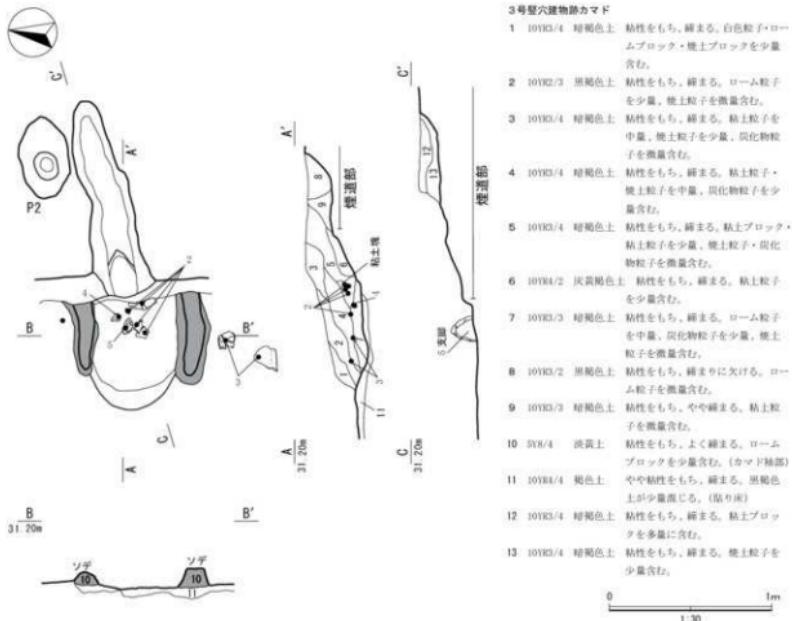
覆土は含有物の違いにより3層に分層され、暗褐色土を主体とし、自然堆積を呈するものと判断される。壁溝は検出されなかった。

本遺構に伴う遺物は多くはないが、今回の調査では比較的遺存の良好な土師器甕がカマドを中心に出土している。総重量で2,764.6g、総点数で184点の遺物が出土し、須恵器、土師器の他にはやはり混入した繩文土器片36点、412.9gが含まれていた。カマド周辺から出土した土師器甕や石製支脚など5点を図示した。1は須恵器甕の底部の細片ではあるが底部外縁部に回転ヘラケズリが施されている。2はカマド内出土の土師器甕で口縁部は検出できなかつたがその特徴から「常陸型甕」とみられる。3もカマド脇より出土した土師器甕で小型の「常陸型甕」である。4は土製支脚片とみられよく被熱しているものとみられる。5は凝灰岩製の支脚とみられ、よく被熱し脆くなつており器表面も剥離が著しい。

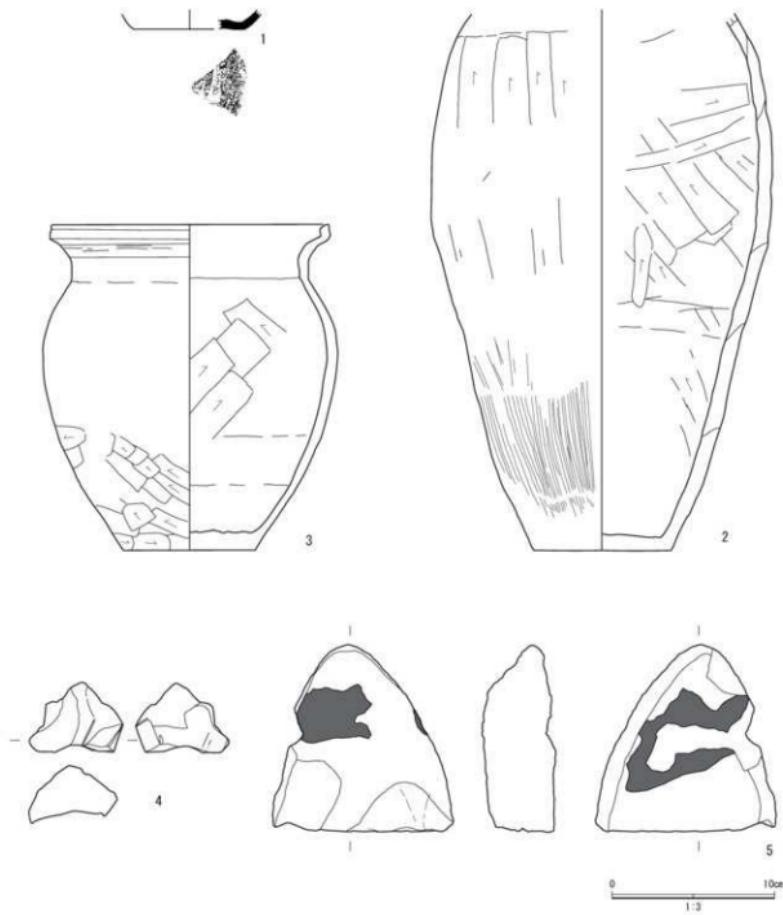
本遺構の時期は少ない出土遺物から判断すれば、1号竪穴建物跡と近似するおよそ8世紀後葉から9世紀前葉を主とする時期とみられ、やや新相を示す。



第13図 3号竖穴建物跡



第14図 3号竖穴建物跡カマド



第15図 3号竪穴建物跡出土遺物

第7表 3号竪穴建物跡出土土器属性一覧

番号	出土 地點	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	施土	焼成	色調	備考
1	S13 一括 埋	須 恵 器	壺	底部	細片	—	(6.8)	<1.2>	口縁部外面ヨロナデ、脚 部下半ヘラケズリ。内面ナ ダ。	白色粒子・石英・ チャート・小織	良好	内外面 NS/0 灰色	
2	S13 覆 土 カマド	土師 器	甕	脚部 ~底部	40	—	8.4	33.2	脚部ヘラケズリ。後ナデ。 内面ヘラケズリ。	白色粒子・石英・ チャート・小織	良好	外 7.5YR5/3 にぶい褐色 内 7.5YR4/2 灰褐色	「常陸型甕」
3	S13 覆 土	土師 器	小形 甕	口縁部 ~底部	85	17.0	8.0	20.1	口縁部外面ヨロナデ、脚 部下半ヘラケズリ。底部本 葉組、内面ナダ。	白色粒子・ 黑色粒子・石英・ チャート・砂粒・ 小織	良好	外 7.5YR5/3 にぶい褐色 内 10YR5/4 にぶい黄褐色	「常陸型甕」
4	S13 覆 土	土製 品	支脚 s	—	細片	長さ (3.9)	幅 (7.7)	厚さ 3.5	小破片。被熱顯著。 支撑的一部分。	白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 砂粒・小織	不良	10YR8/4 黄褐色	

第8表 3号竪穴建物跡出土石器・石製品属性一覧

番号	出土地 点	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴・手法	備考
5	S13 覆土	石製品	支脚	11.5	11.0	4.5	273.8	(注)完形、板熱顯著。外面部離離。	凝灰岩

(2) 溝状遺構

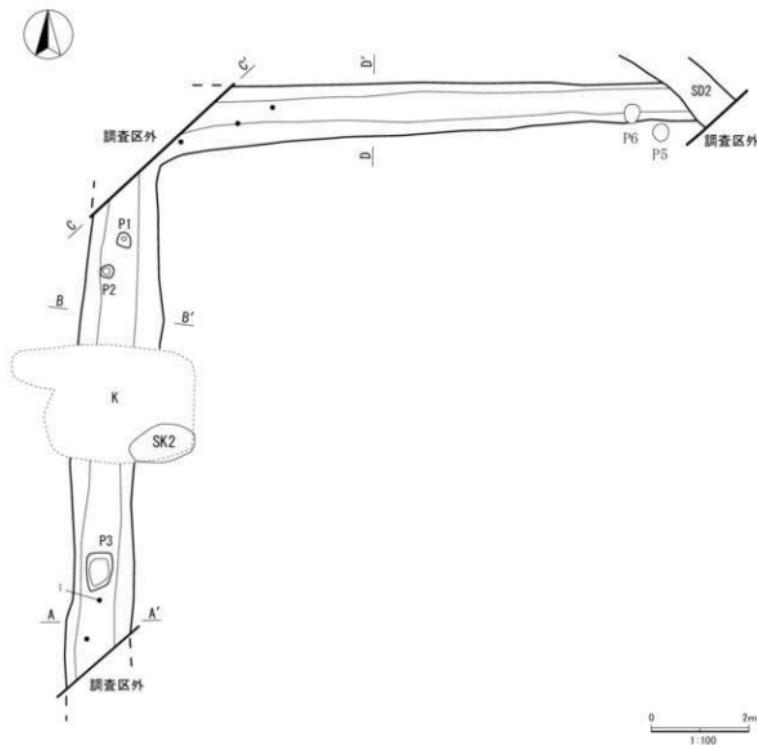
1号溝状遺構 (第16-17図、第9表、図版5・6・9)

調査区A区のE・F・G-2・3・4・5グリッド、今市・七本桜軽石層より20cm程上位にて検出された。G-2・3グリッドからほぼ真北へと延び、E-2・3グリッドの調査区際で90度東方向へと進路を変え延びている。南側、東側の両端とも調査区外へと続いているものと想定される。F-2・3グリッドでは大きな擾乱により一部を壊されており、東端部では2号溝状遺構と重複し、壊されている。検出した範囲は南北方向で12.4m、東西方向12.3mで、幅75~160cm、確認面からの深さは50cm程で断面形状は逆台形状を呈す。

覆土は黒褐色土と暗褐色土を主体とし、自然堆積とみられる。底面でピットを3基検出している。P1は最大径35cm、深さ26cm、P2は最大径29cm、深さ14cm、P3は平面方形でやや大きく長径78cm、深さ10cmを測る。

出土遺物は、遺物は少なく總点数で71点、總重量で1,792.0gである。須恵器、土師器の細片が出土しているほかに混入した繩文土器片37点、644.6gが含まれる。遺存の良好な4点を図示したがいずれも覆土の上層よりの出土である。1は須恵器の蓋でボタン状摘みを有し、天井部は回転ヘラケズリがみられる。2は細片だが須恵器壺である。3は高台付盤で高台部がハの字状に開く。1から3の須恵器は少量だがいずれも海綿骨針が含まれることから木葉下窓跡群の製品とみられる。4は土師器甕の口縁部片で古手の長脣甕の形状となり、混入したものであろうか。

本遺構の時期は少ない出土遺物からの判断となるが、やはり他の竪穴建物跡に近い8世紀後葉から9世紀前葉を主とする時期とみられ、やや古相を示す。

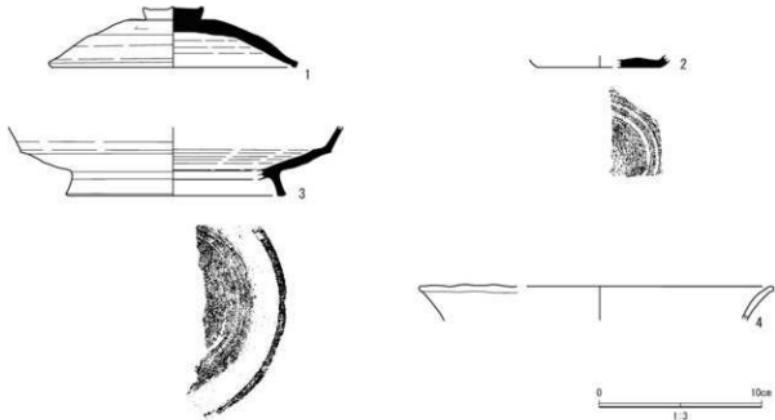


1号溝状遺構

- 1 10R3/2 黒褐色土 粘性をもち、縮まる。ローム粒子を微量含む。
- 2 10R3/1 黒褐色土 粘性をもち、やや縮まる。ローム粒子を少量含む。
- 3 10R3/1 黒褐色土 粘性をもち、やや縮まる。ローム粒子を少量、ロームブロックを微量含む。
- 4 10R3/3 墓園色土 粘性をもち、やや縮まる。ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。



第 16 図 1号溝状遺構



第17図 1号溝状遺構出土遺物

第9表 1号溝状遺構出土土器属性一覧

掲載番号	出土地点	種別	器理	部位	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	SDI 覆土	須恵器	蓋	縫部 ～端部	80	(15.0)	—	3.7	ロクロ成形。扁平な断面で 握みを有す。天井部回転ヘ ラケズリ。	白色粒子・ 黒色粒子・石英・ 小礫・海綿骨針	良好	外7.5H6/1灰褐色 内N710灰白色	縫径: 3.6 縫高: 0.7 (単位: cm)
2	SDI 一括	須恵器	片	底部	細片	—	(7.6)	<0.7	ロクロ成形。底部の断面へラ ケズリ。	白色粒子・ 黒色粒子・石英・ 小礫・海綿骨針	良好	内外面 NS/0灰褐色	
3	SDI 一括	須恵器	高台	体部 付壁	40	—	(13.5)	<4.3	ロクロ成形。回転ヘラケズ リ後、高台貼り付け。	白色粒子・ 黒色粒子・石英・ 小礫・海綿骨針	良好	内外面 S7E/1灰褐色	
4	SDI 一括	土器	器	口縁部	細片	(21.6)	—	(2.1)	口縁部内面ヨコナギ。	白色粒子・ 黒色粒子・石英	良好	外10H2/1黒色 内7.5H3/1黒褐色	

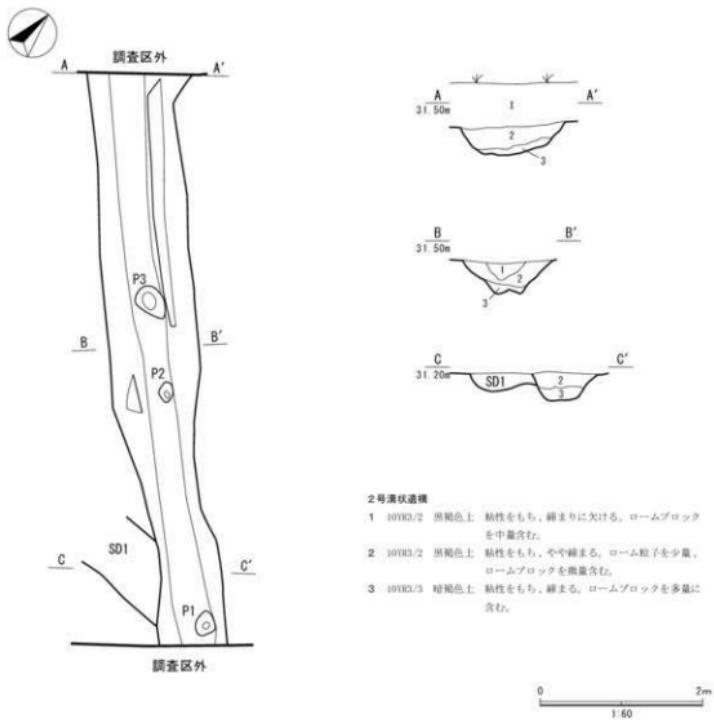
2号溝状遺構 (第18図、図版6・7)

調査区A区のD・E-4・5グリッド、今市・七本桜軽石層より20cm程上位にて検出された。南東から北西方向へ延びる。走行方向はN-50°Wを示す。両端とも調査区外へと続いているものと想定される。南東部では1号溝状遺構と重複し、壊している。検出した範囲で全長7.1m、幅66～110cm、確認面からの深さは30cm程で断面形状はおおよそ逆台形状を呈す。

覆土は黒褐色土と暗褐色土を主体とし縮まりを欠く、自然堆積とみられる。底面でピットを3基検出している。P1は最大径31cm、深さ30cm、P2は最大径25cm、深さ25cm、P3は最大径45cm、深さ20cmを測る。

出土遺物は少なく総点数で18点、総重量で591.7gである。混入したとみられる繩文土器片、奈良・平安時代の土師器・須恵器片が出土している。3号溝状遺構と類似する。

本遺構に伴うとみられる遺物はないが、時期は規模や形状、覆土の状況などから、近世以降の区画溝などの一部と考えられる。



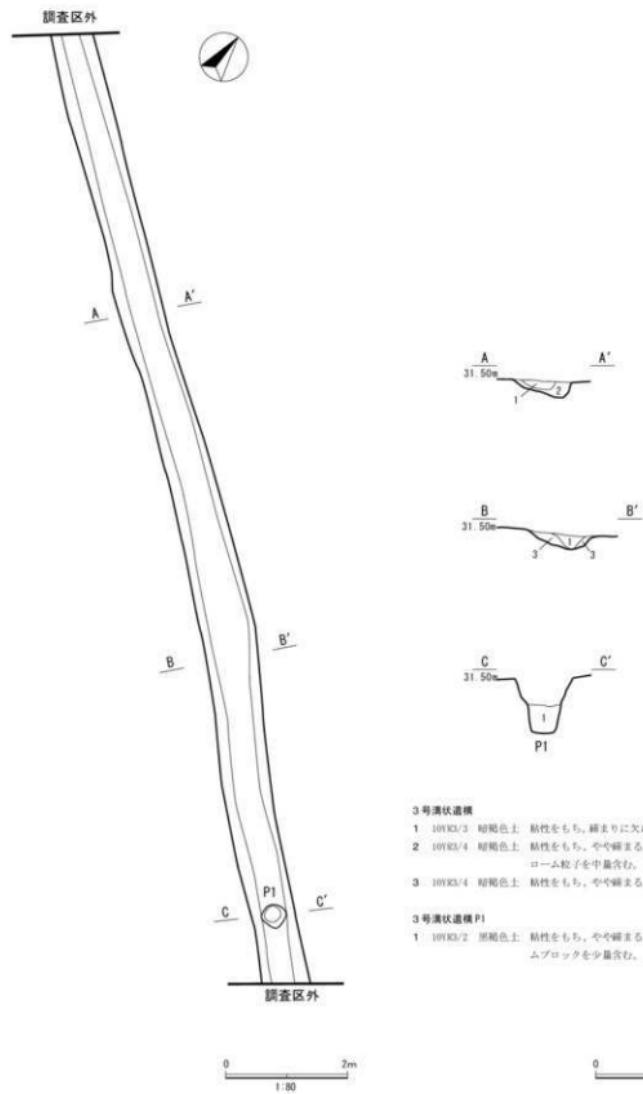
3号溝状遺構（第 19 図、図版 7）

調査区B区のB・C・D-11・12・13グリッド、今市・七本桜軽石層より10cm程上位にて検出された。南東から北西方向へ延びる。走行方向はN-48°Wを示す。両端とも調査区外へと続いているものと想定される。耕作に伴うトレレンチャーが底面まで達しており、一部が擾乱されている。検出した範囲は全長16.0m、東西方向12.3mで、幅66~89cm。確認面からの深さは17~32cmで断面形状は逆台形状を呈すとみられるが北側では上部を削平されている可能性があり浅い。

覆土は暗褐色土を主体とし縮まりを欠く、自然堆積とみられる。底面でピットを1基検出している。P1は最大径41cm、深さ34cmを測る。

出土遺物は少なく総点数で25点、総重量で315.8gである。混入したとみられる縄文土器片、奈良・平安時代の土師器・須恵器片が出土している。2号溝状遺構と類似する。

本遺構に伴うとみられる遺物はないが、時期は規模や形状、覆土の状況などから、近世以降の区画溝などの一部と考えられる。



3号溝状遺構

- 1 10YR3/3 暗褐色土。粘性をもち、締まりに欠ける。ローム粒子を少量含む。
- 2 10YR3/4 暗褐色土。粘性をもち、やや締まる。ロームブロックを多量に、ローム粒子を中量含む。
- 3 10YR3/4 暗褐色土。粘性をもち、やや締まる。ローム粒子を少量含む。

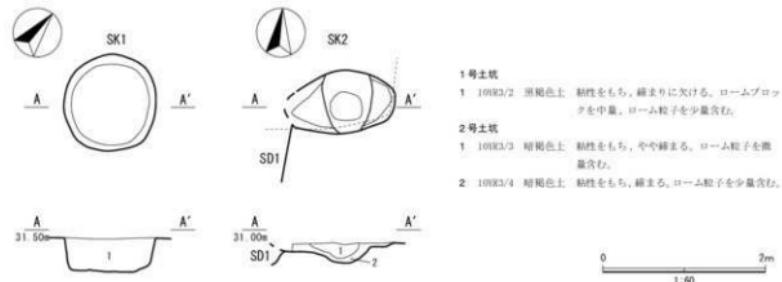
3号溝状遺構 P1

- 1 10YR3/2 黒褐色土。粘性をもち、やや締まる。ローム粒子を中量、ロームブロックを少量含む。

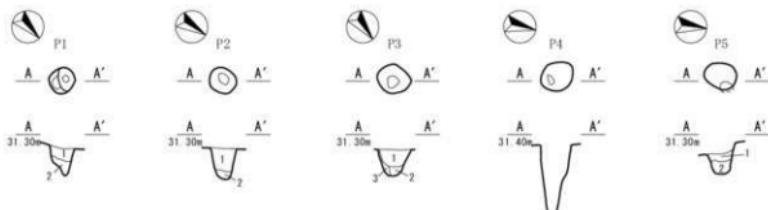
第 19 図 3号溝状遺構

(3) 土坑・ピット (第 20 ~ 22 図、第 10 表・図版 7)

今回の調査区では竪穴建物跡や溝状遺構のほかに、土坑 2 基、ピット 15 基を検出している。各遺構の詳細については第 10 表にまとめた。1 号土坑は平面円形の浅い土坑で覆土は黒褐色土を主体とし縮まりを欠く。土師器の細片が 2 点出土しているが混入したものとみられる。覆土の状況などからも比較的新しい 2・3 号溝状遺構と同じく近世以降のものと判断される。2 号土坑は平面橢円形でテラスを有し、さらに一段掘り込まれるが深い。柱穴状を呈すが周囲に対応する遺構は検出されていない。出土遺物はなく大きな攪乱に一部を壊されている。覆土の状況などから比較的新しい近世以降のものと判断される。ピットは A 区で P 1 ~ 15 の 15 基を検出している。規則的な配置が認められるものはない。P 4 で器表面の摩耗の著しい繩文土器片 1 点、P 5 で遺構外出土遺物として図示した 38 の常陸型甌の口縁部片 1 点、P 9 で繩文土器片 1 点がそれぞれ出土しているがいずれも混入したものと判断される。各ピットはほとんどが暗褐色土を主体とし覆土の縮まりがなく、いずれも 2・3 号溝状遺構や 1・2 号土坑と同じく古くとも近世以降のものと判断される。



第 20 図 土坑



1号ピット

- 1 10RE3/3 暗褐色土 黏性をもち、縮まりに欠ける。ローム粒子を少量含む。
- 2 10RE3/4 暗褐色土 黏性をもち、縮まる。ロームブロックを多量に含む。

2号ピット

- 1 10RE3/3 暗褐色土 黏性をもち、縮まる。ローム粒子を微量含む。
- 2 10RE3/4 暗褐色土 黏性をもち、縮まる。ロームブロックを中量含む。

3号ピット

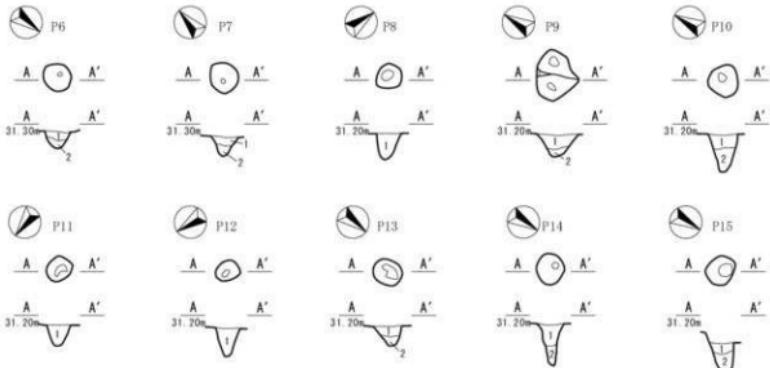
- 1 10RE3/3 暗褐色土 黏性をもち、縮まる。ローム粒子を少量含む。
- 2 10RE3/4 暗褐色土 黏性をもち、縮まる。ローム粒子を多量に含む。
- 3 10RE4/4 暗褐色土 黏性をもち、やや縮まる。粘土質。

6号ピット

- 1 10RE3/3 暗褐色土 黏性をもち、縮まる。ロームブロックを微量含む。
- 2 10RE3/3 暗褐色土 黏性をもち、縮まる。ローム粒子を少量含む。



第 21 図 ピット (1)



6号ピット

- 1 10Y3/4 委褐色土 粘性をもち、締まる。ローム粒子を微量含む。
2 10Y3/4 委褐色土 粘性をもち、やや締まる。ローム粒子を少量含む。

7号ピット

- 1 10Y3/4 委褐色土 粘性をもち、締まる。ローム粒子を少量含む。
2 10Y3/4 委褐色土 粘性をもち、やや締まる。ロームブロックを微量含む。

8号ピット

- 1 10Y3/4 委褐色土 粘性をもち、やや締まる。ローム粒子を微量含む。
2 10Y3/3 委褐色土 粘性をもち、締まる。ロームブロックを微量含む。

9号ピット

- 1 10Y3/3 委褐色土 粘性をもち、やや締まる。ロームブロックを微量含む。
2 10Y3/3 委褐色土 粘性をもち、締まる。ローム粒子を微量含む。

10号ピット

- 1 10Y3/4 委褐色土 粘性をもち、やや締まる。ローム粒子を微量含む。
2 10Y3/3 委褐色土 粘性をもち、締まる。ロームブロックを微量含む。

11号ピット

- 1 10Y3/3 委褐色土 粘性をもち、締まる。ローム粒子を少量含む。

12号ピット

- 1 10Y3/2 黒褐色土 粘性をもち、締まる。ローム粒子を少量含む。

13号ピット

- 1 10Y3/4 委褐色土 粘性をもち、締まる。ローム粒子を微量含む。
2 10Y3/4 委褐色土 粘性をもち、締まる。ロームブロックを微量含む。

14号ピット

- 1 10Y3/3 委褐色土 粘性をもち、やや締まる。ローム粒子を微量含む。
2 10Y3/3 委褐色土 粘性をもち、締まる。ロームブロックを少量含む。

15号ピット

- 1 10Y3/4 委褐色土 粘性をもち、やや締まる。ローム粒子を微量含む。
2 10Y3/4 委褐色土 粘性をもち、締まる。ローム粒子・ロームブロックを少量含む。



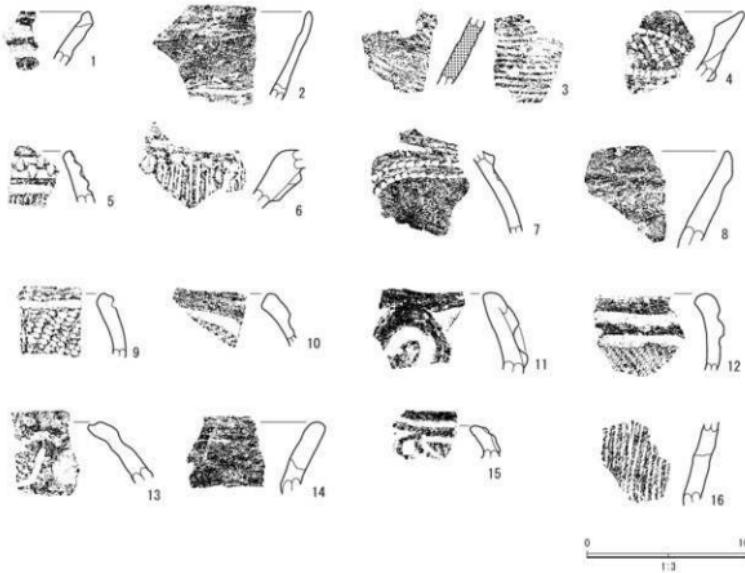
第22図 ピット(2)

第10表 土坑・ピット計測表

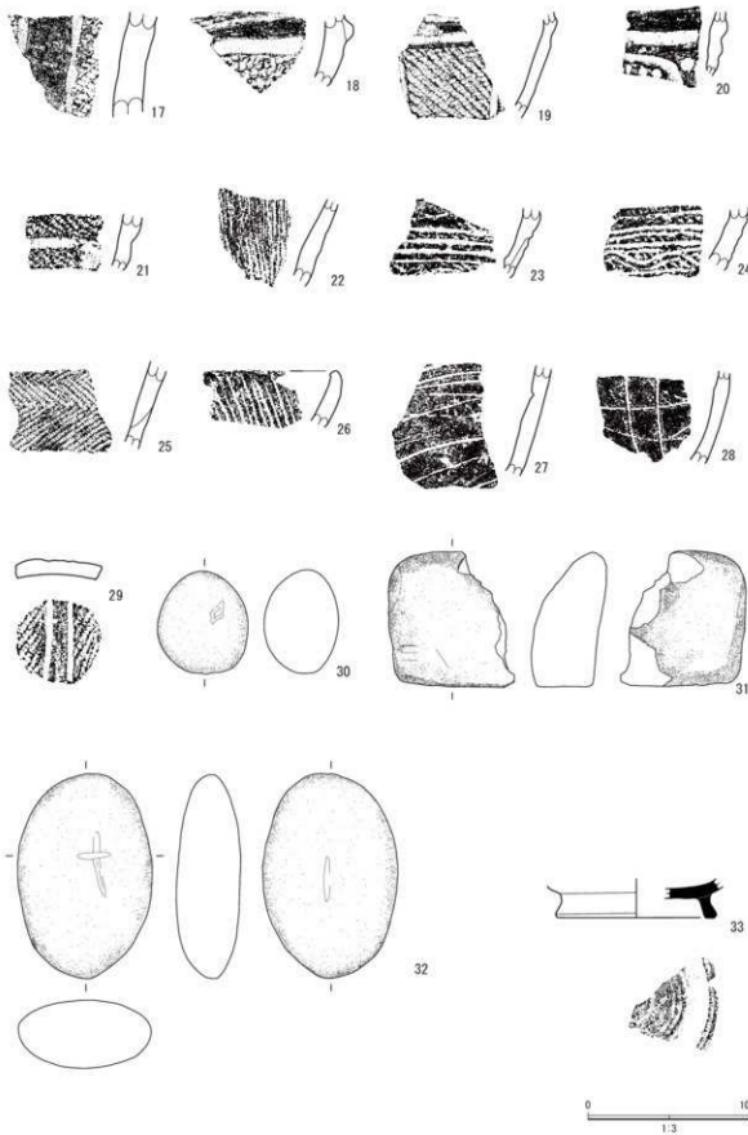
遺構名	位置	規模(cm)			備考
		長径	短径	深さ	
SK1	D-10-11	119	113	39	土師器片2点出土。
SK2	F-3	133	78	24	
P 1	E-5	32	31	33	
P 2	E-5	34	30	38	
P 3	E-5	43	36	33	
P 4	E-5	43	40	83	繩文土器片1点出土。器面摩耗頗著。
P 5	E-5	39	32	25	土師器片1点出土。
P 6	E-5	37	33	21	

(4) 遺構外出土遺物 (第 23 ~ 25 図、第 11 ~ 13 表、図版 9・10)

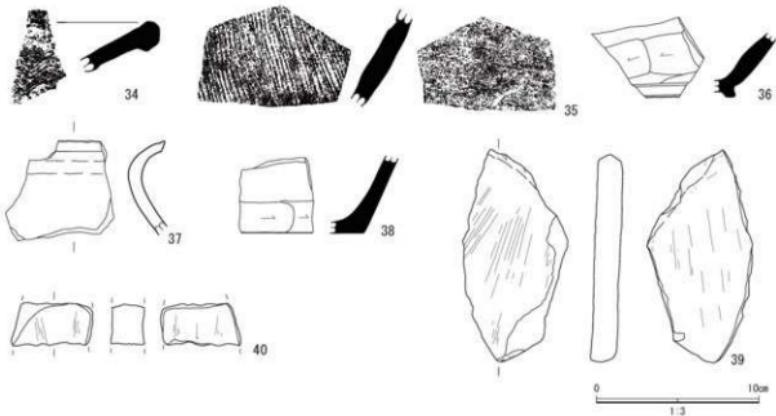
今回の調査区では遺構の主となる奈良・平安時代の須恵器・土師器に加え、縄文時代の遺構は検出されなかつたものの縄文土器の細片が表土中や擾乱内、他時期の遺構の混入遺物として多量に出土している。これは本調査地点の北側に展開することが想定されている縄文中期の環状集落による影響が大きいものとみられる。これらの遺物をすべて遺構外出土遺物として 40 点図示している。縄文土器は早期・中期・後期のものがみられるが中期阿玉台式、加曾利 E 式土器が多く占めている。他に磨石類が目立つ。更に堅穴建物跡と同時期の奈良・平安時代の須恵器・土師器、中世の常滑焼の甕の可能性がある底部片、図示していないが近世の瀬戸・美濃系の陶器片 2 点も出土している。1・2 は早期撫糸文系土器終末期の土器群とされるもので、1 は横位の抉り取るような整形が目立つ。水戸市内の五平遺跡で出土している。3 は縄文時代早期条痕文系土器で胎土に纖維が含まれる。4~8 は中期阿玉台式土器、9~22 が加曾利 E 式土器、23・24 は大木 8a 式土器で、今回の調査では細片で占められるが縄文土器では中期のものが最も多く出土している。阿玉台 II 式から加曾利 E 3 式が含まれており時間幅がある。25 は羽状縄文となるが胎土が他の加曾利 E 式土器と類似している。26~27 は後期の土器とみられ、地文が無文で沈線が格子状や斜位に施文されており、加曾利 B 式土器とみられるが出土量は多くない。29 は加曾利 E 2 式土器の深鉢胴部を整形した土製円盤である。30~32 はいずれも拳大の磨石である。33~38 は奈良・平安時代の須恵器・土師器でいずれも細片ではあるが、今回検出されている該期の遺構と概ね同時期の遺物で占められている。39・40 は磨面が緻密であり、金属製品の研ぎに使用された可能性が高いことから砥石と判断した。



第 23 図 遺構外出土遺物 (1)



第24図 遺構外出土遺物（2）



第25図 遺構外出土遺物（3）

第11表 遺構外出土土器属性一覧（1）

開拓番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率（%）	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	特徴・手法	施土	焼成	色調	備考
1	SII 褐土	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	口縁部断面尖頭状。横位に挟り取ったような形態。	白色粒子・石英・小穂	良好 内7.5YR6/1褐色 内7.5YR6/4にぶい褐色	褐色	縄文時代 早期
2	B区 深糞	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	地紋無文。口唇部断面尖頭状。外縁横位の解脫。内面ヨコナナフ。	白色粒子・雲母	良好 外5YR6/6褐色 内7.5YR6/3灰褐色	褐色	縄文時代 早期
3	SD1 球理土	縄文土器	深林	脚部	破片	—	—	—	外縁部横位条痕文。内面横斜位条痕文。	白色粒子・赤色粒子・石英・チャート・鐵錫	普通 外5YR6/6褐色 内7.5YR7/4にぶい褐色	褐色	縄文時代 中期 貝多文
4	SII 褐土	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	口縁部を接着で区画。連続刻文で文字模様出。内面ナガザ。	白色粒子・石英・チャート・雲母	良好 7.5YR5/3にぶい褐色	褐色	縄文時代 中期 阿五台式
5	B区 黄土	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	口縁部直下に交差刻突文。 沈澱で区画し、以下單縫溝文。	白色粒子・石英・角閃石	普通 外7.5YR5/2黒褐色 内5YR4/4にぶい褐色	褐色	縄文時代 中期 阿五台式
6	B区 黄土	縄文土器	深林	脚部	破片	—	—	—	縫合による区画。継縫の集合部の重複。	白色粒子・石英・雲母	普通 外7.5YR7/4にぶい褐色	褐色	縄文時代 中期 阿五台式
7	B区 一括	縄文土器	深林	脚部	破片	—	—	—	縫合により区画し手堅打竹管による排列押文が場所に沿い並んで有る。 地紋無文。	白色粒子・石英・雲母	普通 外7.5YR4/1褐色 内10YR6/3にぶい黃褐色	褐色	縄文時代 中期 阿五台式
8	SII 褐土	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	地紋無文。口唇部断面尖頭状。口縁外面に縦・横の線。以下横位の解脫。内面は単なるヨコナフ。	白色粒子・黑色粒子	良好 外7.5YR6/4にぶい褐色 内7.5YR7/4にぶい褐色	褐色	縄文時代 中期 阿五台式
9	A区 一括	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	口縁部直下を沈澱で区画。單縫溝文。	白色粒子・黑色粒子・チャート	良好 外7.5YR7/4にぶい褐色 内7.5YR6/3にぶい褐色	褐色	縄文時代 中期 加曾利E式
10	A区 黄土	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	口縁部直下で区画。单縫溝文LR。	白色粒子・黑色粒子・チャート	良好 外7.5YR7/3にぶい褐色 内7.5YR6/2灰褐色	褐色	縄文時代 中期 加曾利E式
11	A区 黄土	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	口縁部直下に堆積で渦巻文。	白色粒子・石英	良好 外7.5YR7/4にぶい褐色 内10YR6/2灰褐色	褐色	縄文時代 中期 加曾利E式
12	B区 深糞	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	口縁部直下に沈澱と堆積で区画。单縫溝文LR。	白色粒子・石英	良好 外10YR4/1褐色 内10YR5/1褐灰色	褐色	縄文時代 中期 加曾利E式
13	B区 深糞	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	口縁部直下に沈澱で区画。单縫溝文LR。	白色粒子・石英	普通 外7.5YR5/4にぶい褐色 内7.5YR5/2灰褐色	褐色	縄文時代 中期 加曾利E式
14	B区 黄土	縄文土器	深林	口縁部	破片	—	—	—	口縁部内外ヨコナフ。	白色粒子・石英・チャート・小穂	良好 外7.5YR6/3にぶい褐色 内7.5YR5/2灰褐色	褐色	縄文時代 中期 加曾利E式

第 12 表 遺構出土土器属性一覧（2）

番号	出土 地点	種別	器種	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	特徴・手法	施土	焼成	色調	備考
15	自治区 表土	縄文 土器	深林	口縁部	縦片	—	—	—	口縁部直下に沈縫と沈継による円形などの文様が突出する。	白色粒子・石英・赤色粒子・石英	良好 内7.5YR6/4にぶい橙色 内7.5YR6/4にぶい黄褐色	縄文時代 中期 加曾利E式	
16	S01 覆土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	燃名文。	白色粒子・石英・チート・角閃石・小鐵	良好 外5YR5.6明赤褐色 内7.5YR6/4にぶい橙色	縄文時代 中期 加曾利E式	
17	S01 覆土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	地文甲節繩文。並走する沈縫が底下、沈縫開きにより消す。	白色粒子・黑色粒子・赤色粒子・小鐵	良好 外7.5YR6/4にぶい橙色 内7.5YR5.8明褐色	縄文時代 中期 加曾利E式	
18	S13 覆土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	太い強面により区画。單輪縄文I型。内面ナガ。	白色粒子・石英	良好 内外面10YR7/4にぶい黄褐色	縄文時代 中期 加曾利E式	
19	S03 覆土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	強帶と沈縫により区画。單輪縄文II型。内面丁寧なナガ。	白色粒子・黑色粒子・赤色粒子・小鐵	良好 外7.5YR6/3にぶい橙色 内7.5YR6/6 橙色	縄文時代 中期 加曾利E式	
20	B区 擾乱	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	強帶と沈縫で区画。鋸不明の継ぎ。内面丁寧なナガ。	白色粒子・石英	良好 外10YR7/4にぶい黄褐色 内10YR5/3にぶい黄褐色	縄文時代 中期 加曾利E式	
21	B区 表土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	地文甲節繩文II型。沈縫が横走る。	白色粒子・石英	良好 外7.5YR6/4にぶい橙色 内7.5YR5/2灰褐色	縄文時代 中期 加曾利E式	
22	S02 覆土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	輪削状工具による条線を縱位に施す。	白色粒子・黑色粒子・石英	普通 外7.5YR6/3にぶい黄褐色	縄文時代 中期 加曾利E式	
23	B区 表土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	地文無文。4条の沈縫が横走る。	白色粒子・赤色粒子・石英・チート・角閃石	普通 外7.5YR4/2灰褐色 内10YR5/3にぶい黄褐色	縄文時代 中期 大木八式	
24	B区 表土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	地文無文。横走する沈縫により文様を描出する。	白色粒子・石英	普通 外7.5YR6/4にぶい橙色 内10YR5/3にぶい黄褐色	縄文時代 中期 大木八式	
25	B区 表土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	左右撓り合せの組合による羽状紋。	白色粒子・石英・チート	良好 外7.5YR6/4にぶい橙色 内10YR4/1褐色	縄文時代 中期	
26	S11 覆土	縄文 土器	深林	口縁部	縦片	—	—	—	口縁部直下に平截竹管状工具による斜位施文。	白色粒子・石英・小鐵	良好 外10YR3/1 黒褐色 内10YR5/4にぶい黄褐色	縄文時代 後期 加曾利E式	
27	S11 覆土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	地文無文。棒状工具による施文は斜位施文。	白色粒子・黑色粒子・赤色粒子・石英	良好 外7.5YR6/4にぶい橙色 内10YR5/1開褐色	縄文時代 後期 加曾利E式	
28	S11 覆土	縄文 土器	深林	胴部	縦片	—	—	—	地文無文。棒状工具による施文は格子状に施す。	白色粒子	良好 外7.5YR4/1 桃灰色 内7.5YR5/6明褐色	縄文時代 後期 加曾利E式	
29	B区 表土	土製 壺	四隅	胴部	縦片	—	厚さ <1.0	—	地文甲節縄文II型。並走する沈縫が底下、沈縫開きにより消す。円形容形状を整える。	白色粒子・石英・チート・雲母	良好 外7.5YR6/4にぶい橙色 内7.5YR6/3にぶい褐色	縄文時代 中期 加曾利E式	
30	S02 覆土	須恵 器	高台 付帯	底部	縦片	—	(9.6)	(2.4)	クロコ成形。底部端部へタケツリ。高台部點付け。	白色粒子・黑色粒子・石英・小鐵・海綿骨針	良好 内外面S6/0灰色		
31	S13 覆土	須恵 器	口縁部	縦片	—	—	(3.0)	—	クロコ成形。面部に3条の輪削状工具により施文。	白色粒子・石英	良好 外7.5YR5/1灰色 内S4/0灰色	硬質砂岩	
32	A区 表土	須恵 器	裏	胴部	縦片	—	—	(5.3)	表面平行タテ矢。自然端。	白色粒子・石英	良好 外7.5YR5/1灰色 内S5/0灰色	安山岩	
33	S02 覆土	須恵 器	裏	底部	縦片	—	—	(3.9)	クロコ成形。底部は低い通り出し尚台。	白色粒子・黑色粒子・石英・小鐵	良好 外S5/0灰色 内S6/0灰色		
34	P 5 土崩 器	石器	裏	口縁部	縦片	—	—	—	クロコ成形。面部に3条の輪削状工具により施文。	白色粒子・石英	良好 外7.5YR5/1灰色 内S4/0灰色		
35	A区 擾乱	須恵 器	裏	胴部	縦片	—	—	—	表面平行タテ矢。輪削痕あり。	白色粒子・石英	良好 外7.5YR5/1灰色 内S5/0灰色		
36	A区 表土	須恵 器	裏	胴部 ～底部	縦片	—	—	(3.9)	クロコ成形。底部は低い通り出し尚台。	白色粒子・黑色粒子・石英・小鐵	良好 外S5/0灰色 内S6/0灰色		
37	P 5 土崩 器	石器	裏	口縁部	縦片	—	—	(5.7)	口縁部外側面ヨコナガ。	白色粒子・石英・チート・雲母・砂粒	良好 外7.5YR6/4にぶい橙色 内10YR6/3にぶい黄褐色	「寒陰型盤」	
38	S02 覆土	須恵 器	裏	胴部 ～底部	縦片	—	—	(4.7)	外側へタケツリ。内面自然釉付着。	白色粒子・黑色粒子・石英	良好 外10YR3/1 黑褐色 内2.5YR7/2灰黄色		

第 13 表 遺構出土石器・石製品属性一覧

番号	出土 地点	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴・手法	備考	
30	S01 覆土	石器	磨石・敲石	6.3	5.6	4.5	243.9	完形。全面を磨り面として使用。端部に敲打痕。		
31	S02 覆土	石器	磨石	8.3	(7.7)	4.6	372.1	一部欠損。全面を磨り面として使用。		安山岩
32	A区 表土	石器	磨石	12.6	8.3	3.9	665.5	完形。全面を磨り面として使用。		安山岩
33	A区 擾乱	石器	磨石	13.0	6.3	1.5	216.5	一高欠損板状で両面が轍平な鏡面で、よく使用されている。金属器で使用か。		砂岩
40	B区 覆土	石製品	砥石	C2.6	4.7	2.0	82.5	破面。二面が砥面として、よく使用されている。金属器で使用か。		擬灰岩

第14表 遺物計量表

種子・樹種		S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	S11	S12	S13	S14	S15	S16	S17	S18	A/R	H/R	B/C	計
	平均	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	15.3	15.9	112.1
不明	無根 (g)	5.1	0	28.9															4	2	41		
中堅樹木 (F)	無根 (g)	10	1	2	10	2	4														106.4	17.0	574.9
中堅樹木 (F)	無根 (g)	15.2	6	18.5	26	7	116.6	18.6	80.5											45.1	106.4	17.0	574.9
中堅樹木 (F)	無根 (g)	1.1	4	8	13	6	6	5	13										8	24	8	95.5	
中堅樹木 (F)	無根 (g)	216	4	98.9	177.2	379.1	87.2	127.4											56.1	206.0	529.3	1086.1	2,056.3
無根樹木 (F)	無根 (g)	1.1	1																2	1	15		
無根樹木 (F)	無根 (g)	231	6	28.0															57.1	216.6	659.7		
無根	無根 (g)	9	1	1															6	40	216.6	279	
無根	無根 (g)	35.0	54.9	12.7															17.9	98.5	147.7	280.9	
不明	無根 (g)	1	16	8	1														11	7	141		
不明	無根 (g)	24.2	5.0	34.0	66.1		17.6												51.8	93.4	35.9	286.3	
H	無根 (g)	1	1				1												3		3	18.0	
雨林 (F)	無根 (g)	7.3	8.0					4.5														1	
土壤 (F)	無根 (g)	17.3	8	130	26			15.0														15.0	
土壤 (F)	無根 (g)	211.7	312.5	1,945.5	1,996.0	13.2	295.5	14.1											3	11	2	15	15
土壤 (F)	無根 (g)	211.7	312.5	1,945.5	1,996.0	13.2	295.5	14.1											27.4	78.3	8.6	80.8	1,925.0
土壤 (F)	無根 (g)	1																	1	1	7.5	7.5	
無	無根 (g)	8	3	1															1	1	3	17	
無	無根 (g)	56.4	165.7	4.6															12.5	96.7	31.5	316.9	
無	無根 (g)	1		3	1	2												3	1	6	9	27	
無	無根 (g)	7.1		12.7	14.1	9.6												17.1	2.5	75.1	80.3	128.6	
無	無根 (g)	3		3	1	3												1	1	1	7		
無	無根 (g)	25.8		1														31.9	11.0	11.0	116.8		
無	無根 (g)	122.2																				122.3	
無	無根 (g)	1																	1	1	2	19.1	
無	無根 (g)	4.0																3	65.1				
無	無根 (g)	6.3	20.2	90.5	96.1													3	1	4	16		
無	無根 (g)	1																11.8	34.7	118.1	130.8		
其他樹木	無根 (g)	5.0																				1	
其他樹木	無根 (g)	1																				5.0	
土製品	無根 (g)																		34.5				
土製品	无根																			231.5			
石製品 (F)	無根 (g)	2.3																				2	
石製品 (F)	無根 (g)	24.3																				24.3	
石製品 (F)	無根 (g)	7.1																					
石製品 (F)	無根 (g)	15	19.1	71	19	27	7	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	11	44	79	109	295.3	
石製品 (F)	無根 (g)	153	191.5	104.0	109.7	317.8	14.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	118.8	1,286.9	1,362.3	1,362.3		
合計	無根 (g)	1,048.0	1,033.0	1,296.0	1,295.0	1,091.7	317.8	14.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

第4章 総括

今回の渡里町遺跡第42地点もこれまでに調査されてきた各地点と同様に奈良・平安時代の遺構が確認された。那賀郡の郡衙・郡寺を中心とする台渡里官衙遺跡群の周辺に展開している周辺集落の一部とみられる。検出された遺構は、堅穴建物跡3棟、溝状遺構3条である。各遺構の時期は伴出遺物が少ないため難しい。2号堅穴建物跡と1号溝状遺構がやや古相を示し、1号堅穴建物跡と3号堅穴建物跡が新相を示すものの概ね8世紀後葉から9世紀前葉を中心とした時期とみられる。1号堅穴建物跡と3号堅穴建物跡は主軸方位がややずれるが、2号堅穴建物跡と1号溝状遺構は明瞭に方位に合わせているように見受けられ、いずれも方位を意識して建てられているものと想定される。1号堅穴建物跡と3号堅穴建物跡は規模が異なるがいずれも東壁中央にカマドを設置しており、いわゆる東カマドの建物となる。このうち3号堅穴建物跡では建物壁面より110cm程延びる長煙道のカマドが検出された。周辺遺跡では、堀遺跡第3地点(003号遺構)や第9地点(SI01)でも類似する長煙道カマドを有する堅穴建物跡が検出されている(第26図)。

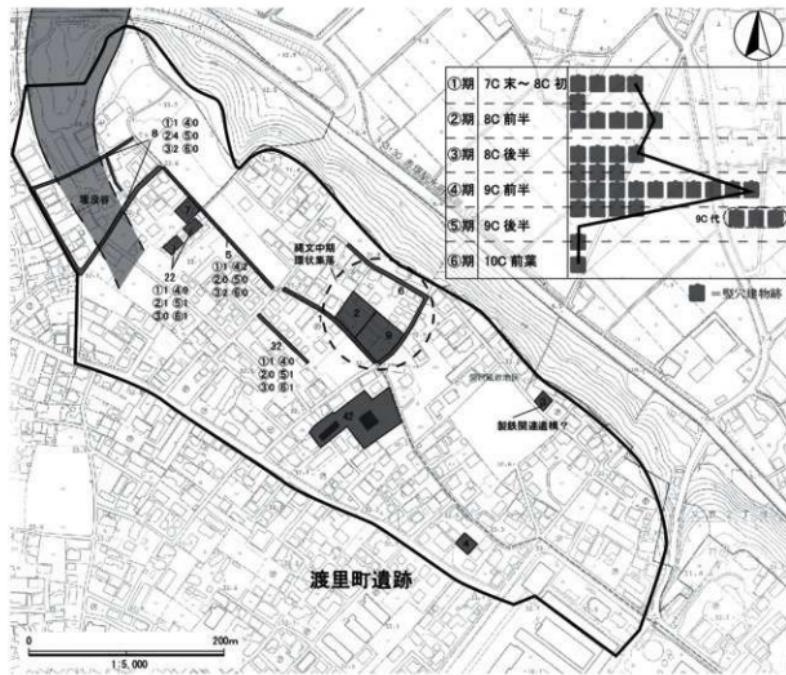
時期は第3地点のものが8世紀前半、第9地点が8世紀第2四半期に比定されている。長煙道カマドは7世紀以降に東北地方で定着をみせ、陸奥・出羽以西では移住させられた蝦夷の痕跡として、この長煙道カマドが俘囚移配の一つの根拠とされている(平野2020・栗田2021)。こうした長煙道カマドを有する堅穴建物跡で占められる集落も存在し、8世紀中頃以降に空閑地の開発に伴い集落が形成され、その周辺には建立に従事させられたであろう



第26図 長煙道カマド

寺院や製鉄、土器焼成などの生産遺構が伴うことが多いとされている。今回の3号堅穴建物跡はこれまでの調査例を踏まえても単独とみられ、蝦夷とされる人々が纏まって移住したような状況は見受けられないようである。また、時期も堀遺跡の例などに比しても新相を示し、8世紀後葉から9世紀前葉とみられるが那賀郡の郡衙・郡寺の周辺集落の一部であることを考慮すれば、郡衙・郡寺の修造に係る労役を意図して移配された蝦夷が居住していた可能性も想定される。出土遺物に関しては故地に因んだような赤彩球胸壺などは検出されていない。

那賀郡の郡衙・郡寺の周辺集落の一部であることを鑑み、渡里町遺跡の現状で明らかとなっている他地点も含め検討すれば、第5・8・22・32地点でも該期の遺構が検出されている(第27図)。いずれも限られた調査範囲であるが、各地点で検出された堅穴建物跡の数量を合わせて示した。時期がおよそ明らかとなっているものは34棟で他に9世紀代とみられるものが5棟ある。検討する堅穴建物跡数は少なく不十分ではあるがおよその傾向は示しているものと推測される。7世紀末あるいは7世紀後半に出現した集落は徐々に数を増し、9世紀前半にピークを迎える。その後は徐々に衰退し、10世紀前葉で姿を消す。觀音堂山地区の初期寺院が9世紀後半に火災により廃絶し、南方地区に再建されるが10世紀初頭には終焉を迎えており、運動する動きが読み取れる。今回の調査では、方位を意識した1号溝状遺構も検出しており、区画する意図で造られたものであろうがその性格は不明瞭である。また、本調査には至らなかったが試掘調査では調査区の北側に2棟の堅穴建物跡が検出されている(第1図)。



第27図 周辺遺構分布図

第22地点などは遺構分布密度が高く、渡里町遺跡内でも官衙に近い西側の遺構密度が高いものと推測される。宅地化が進み狭小な範囲の調査が多く続く地域ではあるが渡里町遺跡に加え、同じ性格を有するとみられる堀遺跡なども合わせて官衙周辺集落の様相が徐々にではあるが明らかとなりつつある。

今回遺構は伴わないものの、多く出土した縄文土器片は中期阿玉台II式期から加曾利E3式期が占めている。これは北側の第1・6地点の調査で想定されている環状集落との関連性が窺える。環状集落の外縁部となるが当地点にも遺物が広がりをみせているものと考えられる。

【引用・参考文献】

- 水戸市教育委員会編 2007 『水戸市埋蔵文化財調査報告 第11集 平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 2009 『水戸市埋蔵文化財調査報告 第22集 平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 2010 『水戸市埋蔵文化財調査報告 第35集 平成19年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 浅井哲也 1992 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(II)」『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財團
- 瀧美賀吾・高野浩之 2009 『水戸市埋蔵文化財調査報告 第29集 渡里町遺跡(第8地点)一市道常磐23,31,307号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』水戸市教育委員会
- 小川和博・大沢淳志・瀧美賀吾・川口武彦・木本掌周・遠藤啓子 2008 『水戸市埋蔵文化財調査報告 第19集 堆遺跡(第9地点)一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』水戸市教育委員会
- 川口武彦・米川暢敏・瀧美賀吾・閑口慶久 2020 『水戸市埋蔵文化財調査報告 第119集 堆遺跡(第9地点)区画 No.1 ~ 12)一造成地内における個人住宅建築に伴う平成19 ~ 21年度市内遺跡発掘調査報告書ー』水戸市教育委員会
- 栗田則久 2020 「集落からみた浮因移配の様相(予察)-上総の長姪道カマドの検討から-」
『研究連絡誌』第84号 公益財団法人千葉県教育振興財團 文化財センター
- 甯藤弘道 1991 『茨城県教育財团文化財調査報告第67集 一般県道友部内原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書
五平遺跡 蔵田千軒遺跡 権現古墳群』財団法人茨城県教育財團
- 2006 『茨城県立歴史館史料叢書9 茨城の調文土器』茨城県立歴史館
- 佐々木藤雄・林邦雄・川口武彦・瀧美賀吾・閑口慶久 2008 『水戸市埋蔵文化財調査報告 第16集 渡里町遺跡(第5地点)一市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』水戸市教育委員会
- 高野浩之・米川暢敏・丸山慶香里 2018 『水戸市埋蔵文化財調査報告 第103集 渡里町遺跡(第32地点第2次)一公共下水道
渡里処理分区私道枝線(4~3工区)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』水戸市教育委員会
- 平野修 2020 「出土文字資料からみた移配エミシ集団の一様相ー帝京大学八王子キャンパス構内遺跡群を事例にー」
『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集 帝京大学文化財研究所
- 米川暢敏・林邦雄・山下瑛梨香・石松直 2016 『水戸市埋蔵文化財調査報告 第74集 渡里町遺跡(第8地点)一集合住宅建築
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』水戸市教育委員会

写 真 図 版

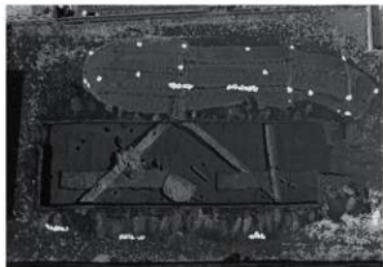


調査区全景 北東から

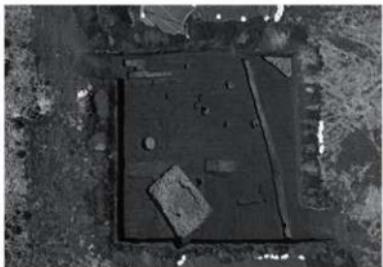


調査区全景 上が北西

図版 2



A区全景 上が北西



B区全景 上が北西



A区全景 南西から



A区全景 北東から



B区全景 南から



B区全景 東から



1号竪穴建物跡土層断面 南西から



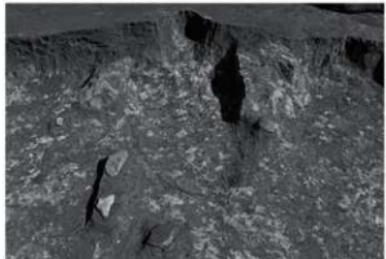
1号竪穴建物跡遺物出土状況 西から



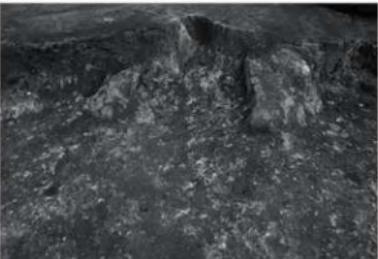
1号竪穴建物跡カマド構築材出土状況 西から



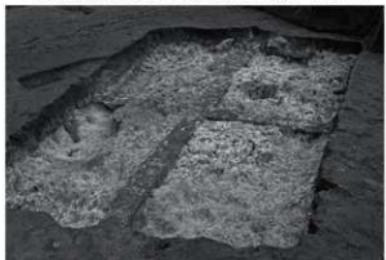
1号竪穴建物跡カマド土層断面 南西から



1号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 西から



1号竪穴建物跡カマド全景 西から



1号竪穴建物跡掘り方土層断面 北西から



1号竪穴建物跡掘り方全景 西から



2号竪穴建物跡遺物出土状況 東から



2号竪穴建物跡全景 南から

図版 4



2号竪穴建物跡掘り方土層断面及び掘り方全景 南から



3号竪穴建物跡土層断面 北西から



3号竪穴建物跡遺物出土状況 西から



3号竪穴建物跡遺物出土状況近景 西から



3号竪穴建物跡カマド土層断面 北西から



3号竪穴建物跡カマド遺物出土状況 西から



3号竪穴建物跡全景 西から



3号竪穴建物跡カマド全景 西から



3号竪穴建物跡カマド支脚出土状況 西から



3号竪穴建物跡貼り床土層断面 北西から



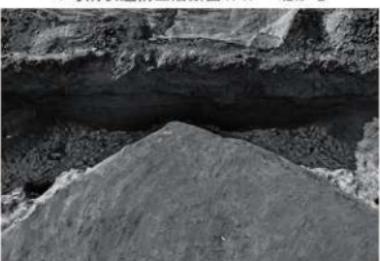
3号竪穴建物跡掘り方全景 西から



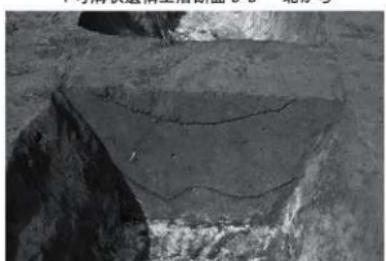
1号溝状遺構土層断面 A-A' 北から



1号溝状遺構土層断面 B-B' 北から



1号溝状遺構土層断面 C-C' 南東から



1号溝状遺構土層断面 D-D' 南東から



1号溝状遺構遺物出土状況 東から

図版 6



1号溝状遺構西側全景 南から



1号溝状遺構西側全景 北から



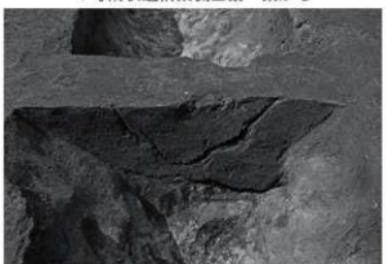
1号溝状遺構東側全景 西から



1号溝状遺構東側全景 東から



2号溝状遺構土層断面 A-A' 南東から



2号溝状遺構土層断面 B-B' 南東から



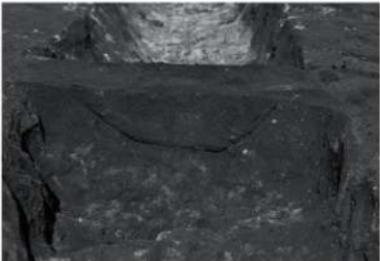
1・2号溝状遺構土層断面 C-C' 西から



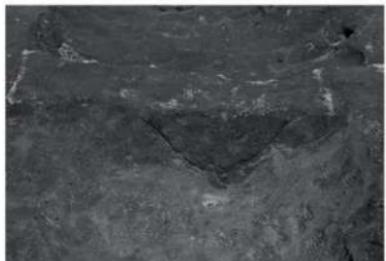
2号溝状遺構全景 北西から



2号溝状遺構全景 南東から



3号溝状遺構土層断面 A-A' 南東から



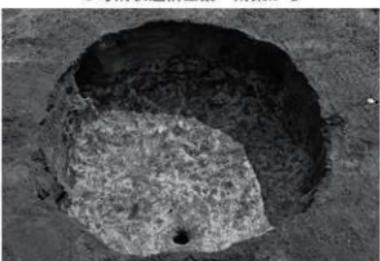
3号溝状遺構土層断面 B-B' 南東から



3号溝状遺構全景 南東から



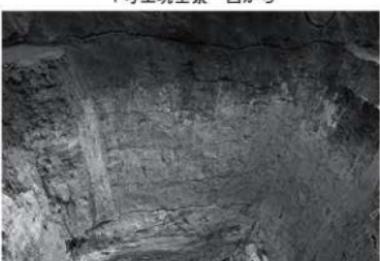
3号溝状遺構全景 北西から



1号土坑全景 西から



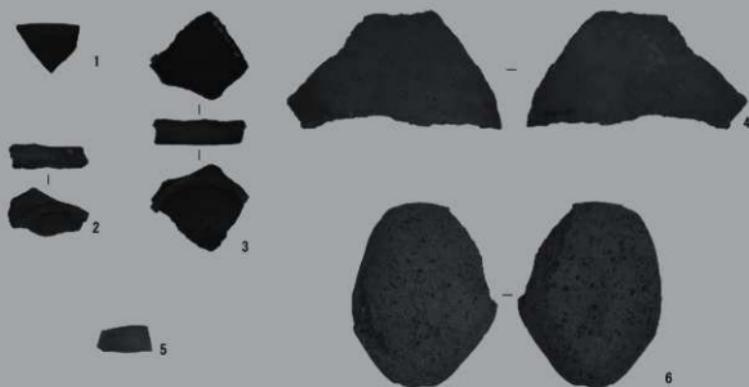
TP1 南東から



TP2 北西から

图版 8

1号竖穴建筑物出土遗物



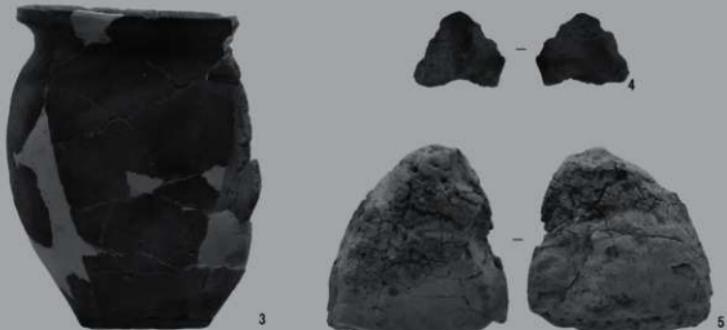
2号竖穴建筑物出土遗物



3号竖穴建筑物出土遗物 (1)



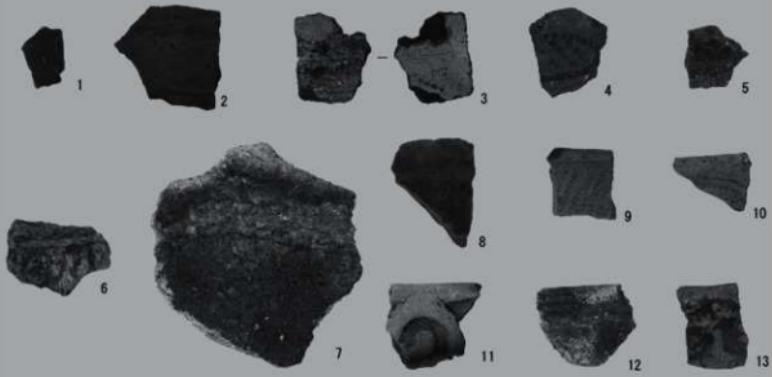
3号竖穴建筑物出土遗物 (2)



1号溝状遗構出土遗物

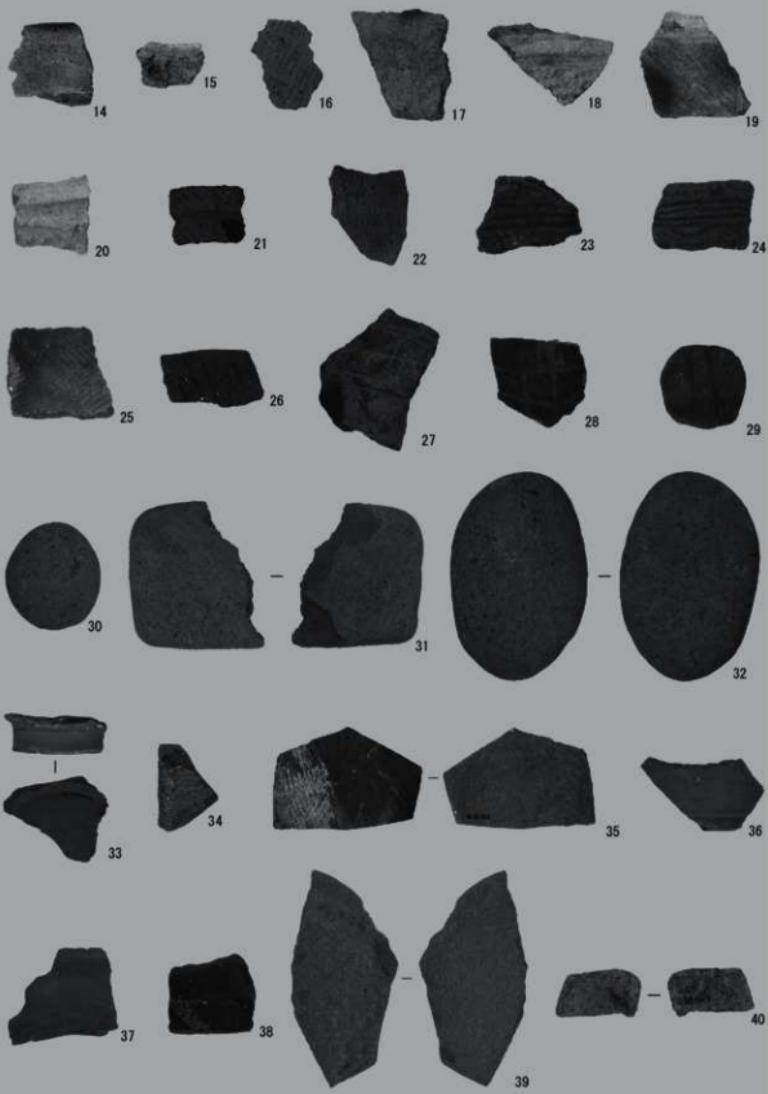


遺構外出土遗物 (1)



図版 10

造構外出土遺物（2）



報 告 書 抄 錄

水戸市埋蔵文化財調査報告 第129集

渡里町遺跡(第42地点第2次)

—学生寮建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 令和4年10月31日

編集・発行 株式会社ラクロ
水戸市教育委員会

印 刷 関東図書株式会社